

本年も例年と同じく1月7日に本会の新年会が開催されました。ただし今年は気分も新たに2年前に竣工したばかりの「新宿イーストサイドスクエア」にある中華「祥龍房」新宿イーストサイドスクエア店に会場を移して、開催されました。

生憎、インフルエンザが流行したため、常連の方々の中で、参加出来なくなった方もおりましたが、ヴァイオリンの恵藤久美子さんのように、初めて参加された方もおり、また音楽評論家の浅岡弘和さん、萩谷由喜子さんも駆けつけて下さり、和やかで楽しい会となりました。それと会費は高くないのですが、料理は例年と比べて美味しかったと好評でした。当夜の雰囲気味わっていただきたく、スナップ写真を掲載します。

(本誌編集長)



後ろのテーブルで語り合う面々、恵藤久美子さん（左）、中嶋恒雄氏（隣り）北條直彦氏などの顔が見えます。

2015年度 日本音楽舞踊会議 新年会 (2)



宴の前：左から助川氏、北条氏、恵藤久美子さん

左：金藤豊氏、右：高橋雅光氏



左より、浦さん、助川氏、萩谷由喜子さん、橘川氏、浅岡弘和氏



左：佐藤光政氏、右：土岐勝信氏



左から、太田さん、高橋氏。高島氏

音楽の世界

音楽
目次

ゲリア 2015 年度 日本音楽舞踊会議 新年会

論壇 世界の音楽から見えてくるもの 高橋 雅光 4

特集 現代における音楽ジャーナリズムのあり方

2014 年を揺るがせた音楽ジャーナリズム関係の事件 萩谷 由喜子 6

ある醜聞とジャーナリズム 浅岡 弘和 10

あったほうがいいのか? 助川 敏弥 14

音楽家と音楽ジャーナリズムについて 高橋 雅光 19

リレー連載 未来の音楽人へ(20) 杵屋 静子 22

連載

音・雑記—ひなの里通信— (75) 狭間 壮 26

名曲喫茶の片隅から (56) 宮本 英世 28

音盤奇譚 (61) 板倉 重雄 30

人・アート・思考塾(10) 小西 徹郎 32

電子楽器レポート・連載—22 高等教育機関とハイブリッドオーケストラ

～日大芸術学部音楽学科、浜松学芸高校芸術科～ 阿方 俊 34

歌の道・我が音楽人生 (12) 久住 祐実男 36

明日の歌を～楽友邂逅点 (第 11 回) -3 橘川 琢 37

コンサート・レポート

日本音楽舞踊会議 声楽部会公演 助川 敏弥 40

日本尺八連盟全国演奏大会広島公演 高橋 雅光 42

埼玉邦楽合奏団第 1 回定期演奏会 高橋 雅光 44

CD 紹介 『久武麻子デビュー～深沢亮子とデュオで～』 46

速報：恵藤幸子さん（青年会員）がロシアの音楽コンクールで優勝 47

コンサートプログラム 第 3 回「動き、舞踊、所作と音楽」 48

皆様へ 『音楽の世界』 刊行体制変更のお知らせ 本誌編集長 59

コンサート案内 麦の会：チャリティーコンサート 60

CMDJ 会と会員の情報 62

作曲：高橋 雅光

西洋芸術音楽いわゆるクラシック音楽以外の音楽に目を向けると、世界には多くの民族が存在する分、さまざまな音楽と音楽理論が存在する。

世界各地の民族音楽を聴いていると、その土地の気候風土や生活・文化が音楽を通して感じられる。但し私が聞こうとしている音楽は、洗練された芸能としての民族音楽よりも、一般庶民が自然に歌ったり奏でたりする音楽であり、そこにこそ音楽の本当の姿があると思うからである。

近年、現代邦楽の分野では、中国や韓国及び他国の民族楽器の演奏家と一緒にコンサートを開いたりすることも行われ、文化交流として成果を上げているが、ここではそういう表面的なことではなく、もう少し音楽の内部に入り、クラシック音楽とは一味異なった音楽の紹介や、我が国の伝統音楽との関連について述べてみたいと思う。

＜循環呼吸法＞

主にこの10年位にクラシックの演奏家の中にも、この循環呼吸法ができる人がポツポツと出てきているが、循環呼吸法とは、主に管楽器を吹奏する時の呼吸法の種類で、鼻から吸った息を喉でいったん止めて、その息を頬にためて口から押し出すと同時に、鼻から息を吸う。吸う息は横隔膜を利用し一瞬に吸い、循環的にこれを行うという呼吸法である。この呼吸法を使うとブレスがなく連続して演奏できるという特徴がある。

この循環呼吸法の存在を、私は既に40年位前から知っていた。それはNHKラジオの朝5時からの放送で、故小泉文夫氏（元本会会員・民族音楽学者）が録音した、「世界の民族音楽」の放送を聞いたからである。その録音は台湾の目抜き通りでの街頭録音であったが、自動車の音や人の話し声・人が通る時の雑音に混じって、眼くらの乞食が吹く横笛の音が聞こえる。3分半位の録音だが、驚いたことに演奏をしている間中呼吸した形跡がない。音は鳴りっぱなしである。しかしその眼くらの乞食は、どこで楽器の奏法と呼吸法を習得したのか。乞食が楽器の奏法と共にその呼吸法をする位だから、台湾のみならず古くから、循環呼吸法はアジアの各地に存在していたのではないかと思う。好奇心をそそる大変興味深い録音であった。

＜大阪の3拍子・朝鮮半島の3拍子＞

日本のわらべ唄や民謡は、2拍子や4拍子の歌が大半を占めているが、大阪のわらべ歌や民謡の中には3拍子系のわらべ唄や民謡が数多くある。近県の滋賀県・兵庫県・京都府にも3拍子系のわらべ歌や民謡はあるが、大阪はダントツに3拍子系の歌が多い。

歴史を開いてみても、大阪・畿内地方は、第15代応神天皇陵や第16代仁徳天皇陵（大仙古墳）等、最大の前方後円墳（円墳の方に遺品や棺を納める＝日本独自

の古墳であり、朝鮮半島に数基前方後円墳が発掘されたが、それは日本から伝わったものであることが日本・韓国双方の検証で明らかにされた。)を抱え、ヤマト政権誕生の地であり、朝鮮半島(ここでは韓国・北朝鮮を含めて朝鮮半島という)からも、農耕民や技術集団等の多くの人が大阪(畿内)の地に、歴史的に住みついたことが実証されている。

また、このことを裏づけるように、大阪人の骨格形質では、頭長幅指数が朝鮮半島の人との比較でほぼ等しいことが明らかになり、弥生時代より多くの人達が、大阪・畿内の地に歴史的に渡来していたことが、ここでも実証されている。

朝鮮半島の民謡(アラン・トラジ・陽山道=ヤンサンド他等)の多くは、3拍子であり、朝鮮半島の人には2拍子の曲でも、体感リズムは1拍を3連打で感じているところがある。遺伝的に3拍子系体質を持った民族であることが解る。朝鮮民謡はどれを聴いても楽天的に明るい。大阪人の底抜けの楽天性とも共通するようにも感じる。

＜ポリリズム・ポリモードと塩梅(あんばい)＞

「ポリリズム」とは、異なったリズムを同時に演奏する複合リズムの事をいうが、拍子についても、2拍子と3拍子を同時に演奏することによってできる、複合リズムを指すこともある。ここでいう「ポリモード」とは、調性の異なる旋法を同時に演奏することを指し、「塩梅」とは複数の音をお互いにあしらい、加減してできる音のずれをいう。ポリリズムの演奏でよく知られているのは、東南アジアのジャワの東にある小島、バリ島の合唱劇“ケチャ”や器楽合奏のガムラン音楽があるが、あまり知られてはいないが、ベトナムの複数で歌われる“祝い唄”の中にポリリズムで歌うところがある。

このようにポリリズムは、東南アジアからアフリカにかけて古くから伝統的に行われているが、ポリモードで代表的な音楽といえば、江戸時代1840年代～60年代(弘化年間から慶応年間)にかけて活躍した、光崎検校の2面の箏による2重奏曲「五段砧」があげられる。「五段砧」の調絃は、高音箏は“本雲井調子”で調絃し、低音箏は“平調子”で調絃され、異った調絃による二面の箏を同時に演奏する様式による作品である。

西洋音楽でポリリズムのような複合リズムや、「5段砧」等のポリモード(複調旋法)の音楽は現代音楽の領域にはいるが、アジアでは古くから伝統的に行われていた。

音を「塩梅」することは、日本の声明・能・浄瑠璃・歌舞伎音楽から歌謡曲まで、どの分野でも表れる現象である。音を合わせるところはピタッと合わせ、音をずらせるところはお互いの「呼吸」や「間」でずらせる。大変難しいところではあるが、これがうまくいくと演者にとっても無上の喜びになる。音の縦の関係を重視する西洋音楽にはない要素であるが、このようにリズムを複合したり、異なる調絃で演奏するのも、音をずらせることも、実はアジア音楽として音楽的に共通する現象であり、こういうことを新たに発見し、その共通性と独自性を明らかにし、音楽創造に繋げていくことが、これからの新しい音楽文化創成に大切なことではないか。

(たかはし・まさみつ 本会 出版局長)

2014 年を揺るがせた音楽ジャーナリズム関係の事件

音楽評論：萩谷 由喜子

2014 年は、音楽ジャーナリズムのあり方が問われる、いくつかの象徴的事件の起きた年だった。

2月5日、佐村河内守なる作曲家を自称する人物が、『交響曲第1番 HIROSHIMA』や『ヴァイオリンのためのソナチネ』など過去に発表してきた主要作に関して、自身の作品でなかったことを公表した。それらはいずれも、一部の音楽ジャーナリズムがセンセーショナルな採りあげ方をしてきた作品だ。弁護士を通じておこなわれたこの発表では、それらの真の作曲者はあるひとりの人物であることまでは明かされたが、その人物には「作曲者として表に出にくい事情がある」として実名公表は避けられていた。

ところが、翌2月6日午後、当時桐朋学園大学非常勤講師であった新垣隆が記者会見を開き、過去18年間にわたって、佐村河内から依頼を受けて佐村河内名義で発表するための楽曲20曲余を代作し、その報酬として18年間でおおよそ720万円を受け取っていたことを告白するとともに、長らく世間を欺いていたことを謝罪した。

前日に佐村河内自身がみずから敢えて「告白」したタイミングというのは、この6日に新垣会見と同趣旨の記事を掲載した週刊誌が発売されることを知っていて、その先手を打つために他ならなかった。

新垣は同時に、佐村河内が聴力障害に苦しんできたとしていることに対しても、一定の疑念をあきらかにした。聴覚障害2級の障害者手帳を取得している佐村河内は、その一事によっても世間から重度の難聴であるとみられていた。ために、その困難を克服して、演奏時間1時間余にも及ぶオーケストラ大作を書き上げたことを音楽ジャーナリズムの一部が奇跡として賞賛し、世論もそれに引きずられる形で彼を畏敬の念をもってみつめてきたことが大きな要因となって、彼は時流に乗ることに成功した。

著名人となった彼は「告白」直前時には傲岸不遜ともみえる振る舞いに及ぶに至り、真実の障害を抱える、あるヴァイオリン愛好少女に絶対服従を要求するほど、奢り高ぶった人格を隠そうともしないまでとなっていた。

『ヴァイオリンのためのソナチネ』はこの少女のために作曲され、少女に献呈されたとされる。彼女の名前と存在がクローズアップされたのは佐村河内の力によるところが大きく、よって、自分の指示にはどんなことでも従うべきだというのが彼

の主張であった。佐村河内は少女とは師弟関係と称し、みずからを師匠と呼ばせていたが、彼がヴァイオリン実技や音楽理論等を彼女に教えた事実はほぼなく、むしろ、少女が幼い頃から音楽上の助言を仰ぎ、心から敬愛してきた真の恩師は、同曲を代作した新垣隆その人であった。新垣に事実の公表を決意させたものは、少女に対する佐村河内の絶対服従要求のエスカレートに心を痛めたことであった。

新垣隆の告白会見によって、佐村河内の大きく分けるとふたつの虚構が暴かれることになった。

ひとつは、金銭を対価として、他人に代作してもらった楽曲を自作として発表してきたこと。もうひとつは、五感のうちでも作曲家にとって命ともいえるべき聴覚に重大疾患を抱え、ほぼ音のない世界に生きながらも不屈の精神力といわば心の耳によって作曲を続けてきたという、お涙頂戴ストーリーである。

その後、佐村河内が新垣への反論ともみられる記者会見をおこない、ゴーストライターに書いてもらった作品を自作と偽って発表したことに対しては一定の謝意を表明しつつも、みずからの身体障碍の状況説明に関してはあながち嘘偽りではなかったことを強弁して、残念ながら本件は、真実がすべて陽のもとに曝け出される、というには至らなかった。

しかしながら、経緯を冷静に見守ってきた者には、およその事の次第はみてとれたであろう。

この一件を、佐村河内の異様なまでの名声欲や、クラシックの作曲家としてはアウトサイダーである経歴からくる反逆精神などに帰することは容易であるが、それだけでは彼が一時期あれほどまでに持て囃され、ほぼ無批判に、「耳の障碍を克服して感動的なクラシック楽曲を書いた奇跡の作曲家」として世間に受け入れられ、驚嘆の眼差しでもってみつめられたことの説明には事足りない。

言うまでもなく、それはつくられたサクセス・ストーリーであって、それを賞賛し流布した音楽ジャーナリズムがあったからこそ、彼は「日本のベートーヴェン」とまで呼ばれ、尊崇の対象となってきたのだ。

音楽ジャーナリズムが世論をミスリードした好例として空前絶後のものと言ってよいこの件に関して、そのミスリードに一役買ったジャーナリズム当事者からは、いまだに、きちんとした説明辞を受けていないように思う。

よくしたもので、その後まもなく、佐村河内事件など芥子粒か砂粒にもみえるほどの、とてつもない欺瞞、捏造事件が生命科学の分野で発覚進行し、世間の関心もっぱらそちらに集まったため、佐村河内本人はもとより、彼の「偉業」を声高に

喧伝した一部音楽ジャーナリズム当事者はどれほど胸を撫で下ろしたことであろうか。

人の噂も七十五日。「告白」からそろそろ1年になろうとする今、佐村河内事件は過去のものとなりつつあるか、もしくはそう仕向けられつつある。しかしながら、このまま頬かむりすることは誰のためにもならない。

佐村河内が「現代のベートーヴェン」と呼ばれて絶頂を極めていた時期に、彼を持ち上げたジャーナリズム当事者は、今からでもよいから、己が彼を盲信してしまった事情を虚心に振り返り、ミスリードの経緯をあきらかにして、二度とこのようなことが起こらないよう、将来への警鐘とすべきであろう。音楽ジャーナリズムの責任をこのままうやむやにしていけないのだ。

さて、今、佐村河内事件など芥子粒にみえるほどの、生命科学分野での捏造事件のことに触れた。その本論は専門分野の識者に譲るとして、ここで喚起したいのは、その捏造事件の根幹である論文そのものの不正疑惑はもとより、同論文の主要執筆者である小保方晴子の「博士号」取得に関してさえ疑義があったことだ。「博士号」は恵まれた条件下で研究を保証され、こうした論文の著者のひとりに名を連ねることのできる必須条件であるが、厳しい審査を通過したはずの彼女の博士論文の主要部分は、なんと、あちこちのインターネット・サイトからのコピー・アンド・ペーストで成り立っていた。

なぜこのことを、クラシック音楽と舞踊の専門誌である本誌で問題視するのか。

賢明な読者ならすでにお気づきのように、2014年には、佐村河内事件に続いて、ある音楽評論家が新刊の演奏家名鑑の某演奏家の紹介記事に、インターネット・サイト「ウィキペディア」本文を一言一句違わずに流用、というより、コピー・アンド・ペーストしてそのまま公刊に至った事件が発生したからである。

この一件は、読者からの指摘によって初めて発行元の編集責任者が気づき、本人に確認して本人もその事実を認めて、関連雑誌にごく小さな謝罪広告が出た。だが、問題の名鑑そのものは、回収も廃棄もされていない。

発行元はたまたま音楽月刊誌を擁していたから謝罪広告を出すことができたが、もしも、そうした媒体を持たない出版社であったなら、いったい、どのような謝意の表明方法があったであろうか？

しかもまったく同時期、その同じ評論家が大手新聞に書いた公演評も、インターネット・サイトの個人愛好家のレビューをほぼ引き写したものであることが、やはり読者からの指摘によってあきらかとなり、これまた本人が認めて、同新聞紙面に小さくお詫びの記事が掲載された。

他人の言説の流用などあるまじきことというだけではなく、アマチュアの音楽愛好家のレビューの主旨をプロの音楽評論家がみずからの視点として活字化したことに、より大きな問題がある。さらに言うなら、演奏家名鑑についても、この新聞公演評にしても、そこに編集者によるチェック機構が全く働かなかったこと、善意の読者によって指摘され初めて気づいたことも極めて遺憾であって、何故そのような事態となったのか、真摯に、徹底的に省みられるべきである。

この件に関して、筆者の同業先輩が、あるベテラン編集者に再発防止の徹底と、その評論家への原稿依頼自粛の意向を問うたところ、

「だって、みんなやっているでしょ」

と言われて、猛烈に抗議したときいた。

もしもこれが、世の編集者一般の認識であれば、もう涙すら出ない。

インターネット時代となってから、我々音楽ジャーナリズムに携わる者はその計り知れない恩恵を受けてきた。書き手も編集者も同様である。

その恩恵はまことに大きく、今ではこれなしにはちょっとした書きものにも不便を感じるほどだが、便利な刃物は使い方を心得るべきであろう。書き手は節度と矜持を持つことで、刃をみずからに向けずに済むが、チェックする側の編集者は日々接する夥しい数量の原稿からコピー・アンド・ペーストや剽窃を見抜かなければならず、これは実際、不可能に近いことだ。

つらつら思うに、いずれの事件も、当事者を弾劾するばかりでは真の再発防止にはならない。

どのような機構の中から、どのような経緯で、どのような動機が働いてこれらの事件が起き、発覚したか、事件が表沙汰になった現在、当事者や関係者がどんな所感を持っているか、徹底的に解明されてこそ、再発が防げるのではなかろうか。

音楽ジャーナリズムの明るい未来のために、当事者、関係者は誠意と勇気をもって事件を総括していただきたい。（文中敬称略）

（はぎや・ゆきこ 音楽評論家）



【萩谷由喜子 プロフィール】

音楽評論家。本誌ほか『音楽の友』『モストリークラシック』『ショパン』誌、産経新聞等に執筆。専門研究分野は日本の洋楽受容史、女性音楽史。『五線譜の薔薇』『音楽史を彩る女性たち』『幸田姉妹』『田中希代子』『ショパンをめぐる女性たち』『宮澤賢治の聴いたクラシック』等著書多数。2013年『諏訪根自子～美貌のヴァイオリニストその劇的生涯』で第1回ハンナ賞受賞。中央区民カレッジ、文京アカデミー講師。

ある醜聞とジャーナリズム

音楽評論：浅岡 弘和

あれから一年…昨年は初っ端から佐村河内、小保方といったスーパースターが実はトリックスターだったという大変事、大珍事が続いたが、この一年間はずっと、この国にはこんなにおかしな人間が多かったのかと感心するくらい日本列島が怪人物（快人物？）のオンパレードだったのである。その影響からか「死んだ筈だよ、おタケさん？」あの野口剛夫氏まで見事に息を吹き返したのには驚いた。

佐村河内に関して言えば筆者の知人のクラオタは誰一人として関心を持っていなかった。文春で騒がれてから面白がってCDを買った人はいたが。かく言う筆者も三枚買うと30パーセント引きとかのキャンペーン商品だったので枚数稼ぎのため買うには買ったが一度聴いただけである。長ったらしい上に暗いし重過ぎるしで、こんなものを聴くより本物のマーラーとかショスタコを聴いた方がずっといいだろうと思った。

では19万枚もいったい誰が買ったのであろうか？評論家筋もよほどのお調子者以外は仕事で頼まれた人しか論じていなかった筈である。筆者も提灯記事で演奏会の日付を紹介したくらいで専門誌より新聞や一般誌ばかりが採り上げていたようだ。そもそも音楽事務所がフジコやソプラニスタのようなイロモノ、キワモノばかり抱えている所なのである。

佐村河内はいったい何で全マスコミからここまで一方的に袋叩きにされなければならなかったのか？佐村河内の謝罪会見を視たら正義派を気取った神山典士という文春の記事を書いたライターの方がよほど胡散臭く思えた。この事件は「オウム事件」のような凶悪犯罪ではない。佐村河内はサリンを撒いて人を殺したりはしていない。むしろ全マスコミから一方的に糾弾されたという点ではオウムより「イエスの方舟」に近いとさえいえる。「方舟」の時はサンデー毎日がマスコミの良心の役割を果たしたわけだが、今回は？あの謝罪会見も逆ギレと評したマスコミが多いけれど、一方的に叩き潰すだけで一切の弁明を認めようとしないのがマスコミの本質だろう。昔の江川騒動などもそうだった。それにしても自らの非を認め謝罪会見まで行った佐村河内がマスコミから一方的に叩かれたのに「STAPはありまーす」徹底抗戦を主張した小保方には擁護する人が沢山いたとは。女は得た。

筆者がこの事件を割と軽く考えているのは、日本の生物学界を震撼させ自殺者まで出した小保方事件に比べ、この事件で大きな被害を受けた人は誰もいないからである。強いて言えば音楽事務所とドタキャンされたオーケストラくらいか。それに最近何かと話題の某イケ面指揮者？ CD会社は儲けたし信用を落としたといってもどちらにせよクラシックのCDなんてたいてい売れやしないのである。(CDを買った人はヤフオクで儲けたのでは?) また被災地の人の心を弄んだといってもそれはどっちもどっち、お互い様であろう。佐村河内守という有名作曲家を人寄せパンダか広告塔のように利用して来たわけだから。数年前、知人の無名指揮者が福島でチャリティーの「第九」を演奏したが、見事にコケてしまった。やはり無名では誰にも相手にされない。知り合いのヴァイオリニスト嬢が行った時もやはり十把一絡げの扱いだっただのである。

音楽現代

2015年2月号 定価 864円

♪特集 = 生誕150年記念 ジャン・シベリウス
& カール・ニールセン
『北欧の音楽の魅力』

♪カラー口絵

・ローム ミュージック ファンデーション

「フレンズコンサート」

・名古屋二期会「こうもり」

♪短期連載 [インタビュー] =

ドイツの歌劇場から「沼尻竜典」

♪インタビュー

アルヴォ・ペルト、海老彰子、新田ユリ
小山裕幾、茂山童司、中桐望、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 Tel.3861-2159

本気で怒っているクラオタは皆無ではなかろうか。正統的なクラシック音楽ファンは現代のベートーヴェンなんてヨタ話を誰一人信じちゃいなかったしそんなものを信じる方に問題があるだろう。騙されたのはおバカなマスゴミだけでクラオタは別に誰も騙されちゃいない。大珍事ではあるが他人事だった。筆者も色々笑えるところがあって面白かったが、佐村河内が最初に使っていたサングラスなしの写真などまるで仮面ライダーに出て来る怪人のようだったし、障害者や被爆者を売り物にしたいと言っただくせに平気でやっているし…やはりこんなものを真に受ける方がマヌケ過ぎるだろう。

義手でヴァイオリンを弾く少女を傷つけたというのもどうなのだろう？ 文春の記事では「堪え難い強制」とか言ってまるで佐村河内がこの少女を性的な毒牙にかけようとしたようにも読めるが、セクハラ紛いの事があったと匂わせる方が悪質だしよほど少女を傷つけると思われる。また「このまま演奏を続けたいなら。私に謝れ」という言葉だって前後関係が不明では判断しかねる。おそらく佐村河内の言うようにメールのやりとりには(中略)とかで相当な印象操作がされているのだろう。全ての事柄はTPOで全く異なる。活字では絶対に伝わらないものがある。体罰教員などを極悪人にしたてる際にもその手の「編集」はよくされる。文春と神山はメールの全てを提示するべきだろう。

それでその酷い強制とやらの正体は結局具体的には「卓球部に入るな」だけなのだから呆れてしまう。そんなことは当然であろう。そりゃ父親は娘に色々なことをさせたいだけでヴァイオリンもその一環に過ぎないのかもしれないが、もし本当にプロのヴァイオリニストを目指すのだったら卓球なんてやっている暇はない。二兎を追うもの一兎も得ず。佐村河内の方が正論といえる。知り合いのあるヴァイオリニストは若い頃、毎日8時間も練習していたという。指が酷く変形してたから本当なのであろう。そもそもピアノやヴァイオリンは親が子供に強制させてやらせるもの。普通は5歳以前からやらせないで物にならない。物心がついてからでは遅いのである。

さらに巨大なサントリーホールでも障害が一目でわかるように義手を外させたのを「義手に感動するんじゃない、演奏に感動するんだらう」と言ったのには心底呆れ返った。この御仁は何をきれいごとばかり言ってるのだから。神山の方こそ辻井本とかその手の美談本みたいなものばかり書いてるくせに。そもそもそんなことをマスコミに言う資格はないだろう。被災松で作ったヴァイオリンとか被爆ピアノとかその手の話ばかりではないか。佐村河内に簡単に騙されたのだからその種的美談好きのせいではないのか。だいたい神山自身がかつての友人佐村河内と共同でこの少女を応援し「美談本」を執筆していた。さらに実は神山もゴーストライターであって、何故佐村河内がゴーストライターを使ったのは悪く、神山自身がゴーストライターとして何十冊も執筆したことは許されるのかについて明確な説明は一切なされていないのである。新垣同様自首すればよいとでも言うのだろうか？

それに佐村河内の言うことは演出としても最高だろう。あの巨大なサントリーホールに小さな女の子がただヴァイオリンを持って出てきてもいちいち説明しなければならぬ。それが義手を外して出てくれば「何か女の子が出て来たけど誰だろう？右手が変だな」と思っていたら、舞台に立ちやおら義手を取り出してカチッと装着！ヴァイオリンを弾き始めれば、ああ、あれがミックンか！とそれだけでサプライズ。感動してしまう。主催者側が説明するのではなく聴衆が自分で気がつくようにさせる。これは重要なことである。「皆まで言うな」おそるべきプロデュース能力。おそらくこのプロデュース能力あったらこそ交響曲「ヒロシマ」が19万枚も売れたのだから。佐村河内は池田●作とか麻原●晃並みのプロパガンダの天才というのは間違いのないところだろう。凄い自己プロデュース能力である。和製ヒトラーにならないで幸いだった。

佐村河内は売名と金儲けが目的であんなことを仕出かしたからけしからんと怒る人もいるが、騙してもいいからあのCDを19万枚売ってくれと言われても筆者では到底不可能である。今や新垣隆もブルーアイランド2世と化したようだが、以前なら新垣のCDは500枚も売ればいい方だろう。本来は売れる筈がない駄曲。御本人の言う通りである。もし筆者がCD会社から「一千万円近い大金をかけて日本人作曲家の交響曲を録音したい」と相談されたら金をドブに捨てるようなものだから絶

対おやめなさいと忠告するだろう。現在の視点から見ればできそうにも見えるかもしれないが18年前の時点では金儲けの可能性も売名できる可能性もほとんどなく、悪心だけから出た行為だとはちょっと考え難い。あのCDも大袈裟に言えば「社運を賭けた」とでも評価すべきものであって、本来は侠気のある企画だったというべきだろう。あの交響曲も偶々売れただけで18年前の佐村河内に野心はあったかもしれないが悪気はなかった。もし筆者がこの事件についてもっと論ずる機会があれば、交響曲の復権を目論んだ男が中心テーマとなるだろう。男のロマン？見果てぬ夢？が脆くも潰え去ってしまったのである。

或いは佐村河内作品というのは梶原一騎の原作付きマンガに比すべきものかもしれない。原作者は絵も楽譜もかけないが「指示書」によりイメージを作って伝えることはできるわけだからオリジナリティが全然ないわけではない。宇宙戦艦ヤマトの原作者は松本零士ではなく西崎義展なのである。

おそらく佐村河内自身も、ここらが潮時だと何度も思った筈。だが止められなかった。ある知人も「人間成功してる時が一番怖い。冷静な判断は絶対できない。最後までこのまま行けるとかってしまうものだ」と言っていたが、株の売り時を冷静に判断できる人間などいないし、カエルをお風呂に入れだんだん熱くしていくと煮蛙になってしまう。感覚が麻痺してしまうのであろう。

ワーグナーなど本物の天才にも詐欺師を兼ね備えていた人物がいる。何しろ王様を騙して国を一つ潰してしまったのだから。そしてあのスティーヴ・ジョブズもたまたま成功しただけで実は佐村河内と大差ないのかも。コンピューターは最初から全部ウォズに作らせていたし、最初に務めていた会社でコンピューターの回路の手直しを命じられ、自分ではできないのでウォズに下請けでやらせ（ゴースト？）しかも5000ドルももらったのに350ドルしかウォズには払わなかったという。アップルは追放されてしまうし酷いものだ。アップル復帰後の活躍がなければジョブズの評価はどうなっていたことであろう？

（あさおか・ひろかず：音楽評論家）

【浅岡 弘和 プロフィール】

音楽評論家。埼玉大学理学部生体制御学科卒業。1990年日本ワーグナー協会創立十周年記念エッセー第2位入選。それをきっかけにクラシック音楽専門誌「音楽現代」を中心に評論活動を展開する。作曲家論、演奏家論、演奏会評、インタビュー、レポートなどを執筆。他にCDライナーノート、演奏会プログラムや新聞のコラムなども多数あり。日本推理作家協会会員。著作に「モーツァルトと歎異抄」「二十世紀の巨匠たち」など。



あったほうがいいのか？

作曲 助川 敏弥

議論がなくなった時代

雑誌、新聞をみても、演奏会評、作曲評で人が議論をしなくなった。近年の風潮である。これは音楽評だけでなく、政治、思想、社会、評論界全般の傾向であるように見える。1990年共産圏が崩壊し、思想、政治上の対立が消滅したことが原因であろう。

議論がない社会は、おだやかなのか、無気力、沈滞化なのか、どちらとも解せよう。しかし、音楽評論、その中でも作曲界の評論については、たとえ無気力でも、いまの方がいいと私には思えるのである。それほど、過去のこの世界の言論行為はひどいものだった。私の世代が引退の時期が来ているのだから、私は世代の責任としてこのことを告発、記録しておく義務があると痛感する。私の年代になれば陰湿な報復を受けるおそれもないし、それこそ無気力な時代だから心配も無用という次第である。

評論は文字と言葉の世界である。文字言葉が披露されるためにはその場が必要である。新聞、雑誌ということになる。ここで名指しで私が告発するのは雑誌である。音楽之友社が発行していた「音楽芸術」という月刊誌である。さいわいこの雑誌は10年以上前に廃刊になった。めでたい限りである。

月刊誌「音楽芸術」の偏向

1960年代は独善的な「通称前衛」派の作曲が蔓延した。これは日本だけでなく、世界の風潮だった。英語でも「60 Years Vanguard」という言葉が使われる。当時アメリカがヴェトナム戦争に行きづまり、世界中で学生運動、反体制運動がひろがり、安田講堂事件、ハイジャック事件などが相次いで起こった。「通称前衛」作曲の蔓延もこの背景から起った。この風潮を背景にしたのであろうが、「音楽芸術」誌の内容は傍若無人なものだった。実例をあげると、通念上保守派と見られていた作曲家Bさんに対して、礼儀を無視した文章がこの雑誌にのった。ある作曲家の文である。およそどのような論議でも礼儀の限界というものがある。この文はその限

界節度を無視した個人の人格への誹謗中傷であった。Bさんは精神的に強い人があったから、この言論の暴力に耐えて信念をまげなかった。しかし、作曲界には意志の強い人ばかりではない。若い人、まだ自分の音楽観が確立していない人も多い。こういう言論行為がその世界全部にどのような影響をあたえたか。

文学の世界では、そもそも雑誌の数が多い。文学界でも五つくらい主要な雑誌が出ている。数が多ければ、その中で保守派的な傾向のものもあれば新しいものを応援するものもありそれぞれの傾向で均衡が自動的にとれる。しかし、音楽界、作曲の分野では評論の商業雑誌は「音楽芸術」誌ひとつしかなかった。これがいかなる悪影響をもたらすか自明である。ここで私が告発したいのは編集者の責任である。礼儀に反する文を掲載するか否かを決めるのは編集者の権限であり責任である。こういう場合には、執筆者に相談した上で掲載の如何をきめることができたはずである。事実、この「音楽の世界」誌で私が編集長であった時、ある作曲家と評論家との間に論争が起こった。両者は次第に加熱して感情的になり、最後に評論家氏から来た文は掲載に疑問を持たせるものだった。私は氏に手紙を書いた。この文が掲載されれば、当事者二人の間には修復不可能な不和が発生するであろうこと、また読者にとっても得るものがないこと、この稿は掲載を見合わせた方がいいのではないかと書いた。評論家から返事が来た。自分もいささか感情的になっていた。扱いはお任せする、というものだった。「音楽芸術」誌では座談会も無礼な発言が載った。これも編集者の責任である。ある作品を無礼きわまる言い方で「嘲笑、愚弄」する。座談の場では話のはずみでさような発言も出るだろう。しかし、原稿に起こされてから、その部分をどう扱うかは編集者の意志によるしその責任権限もある。電話ひとつですむのである。

「自称前衛派」その原野商法 愛好されなくても利益を生む

当時はこの雑誌だけでなく、日刊新聞の音楽欄にも同様なひどい文がのった。こうした風潮がどれだけ日本の作曲界をゆがめたか計り知れない。「自称前衛派」的な傾向のものでなければ世界に通用しないと作曲家たちは脅迫と暗示を受けるのである。こういう破壊的な作用がなければ日本の作曲家はどれだけ豊かな作品が生まれていたかしのれない。

もっとも当時こういう風潮は日本だけではなくたようだ。イギリスが特にひどかったと外国の人から聞いた。「自称前衛派」の音楽を愛好する人がいるわけがな

い。しかし、愛好者がいなくても、新聞、放送、出版がむすべば、ある利益を生み出すことはできるのである。かくして、誰も好まぬ音楽が、放送、新聞、雑誌、で名前だけ作曲者ともども有名になり、権威が発生し、存在可能になり、当事者には利益をもたらすのである。報道が発達した現代社会がもたらす奇奇怪怪な妖怪談であり、それを意図的に演出する音楽事務所も現われる。役に立たない山林を売りつける「原野商法」である。こういう作曲界の闇の連携は「現代音楽マフィア」と呼ばれる。これは国際的な言い方である。

外国とはともかく、日本でのこういう排他的な抗争は政治運動での過激派の活動と共通している。たがいに、実績と実体がないから、ひたすら観念の争いとなる。この点は、日本音楽界の未熟状態からくる現象であった。前衛派、保守派、社会派、それぞれ実体がないからただ理念上の言い争いになり、それは際限なく膨張し、憎悪、嫌悪、排他、となり果てる。政治運動の過激派がついには内ゲバに至ったように、実体のない批判非難は際限ない否定、非難、誹謗になる。

音楽と言葉、音楽評論への疑問

原理的なことは、音楽と言葉の関わり方である。評論は言葉である。対象となる音楽は言葉ではない。これが文学評論界では双方とも言葉が武器であり、相手には言葉で対することが出来る。その表現の場も対等に所有している。音楽では相手は言葉の世界の人ではない。武器は片方にしかないのである。音楽評論とはそもそもこういう不公平、不公正の状況を背景に持っている。言論が沈滞した方がいいとはいいかねるが、悪い組み合わせの評論がわが世の春と蔓延した時代を経験すると、そもそも音楽評論とはなんであるのか、根底から疑念を持たざるをえないのである。

音楽を言葉で評論する。そういうことを始めたのはいつ頃のことからか。多分、ロベルト・シューマンの「音楽新報」あたりだろう。このことに関して奇妙なことがある。

ドイツにかなり歴史がながい音楽雑誌で「メロス」というのがあった。これは学者としても著名な、ハンス・メルスマンが主幹編集していた。内容は前衛音楽推進宣伝で埋まっていた。ショット社が発行していたように記憶する。私の見解によれば「自称前衛派」機関誌というところである。私はこの雑誌をかなり長期にわたり定期購読していた。ところが、いつの時だったか明確には時期が記憶にないが、この雑誌が変貌した。現代音楽ばかり扱っていたこの雑誌が、突然、クラシックも扱

いだしたのである。バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンも、メルスマンが退陣したか、他界したかと関係あるかもしれない。それは不明だが、内容が方向転換したのである。不思議なことは、期を一にして、日本の「音楽芸術」誌の内容にも同様の変換が起こった。急に古典も扱い始めたのである。推理するに、日本とドイツのこの二つの音楽雑誌に同一の意志がはたらいたと思われてならない。前衛、現代、指向がなぜ変わったのか、はなはだ興味あるミステリーである。日本の音楽評論界とドイツのそれとの両方に影響力がある人物が存在したか、私にはそんなふうに推測される。

それはどうでもよいが、転換したということは、その方がいいからであろう。誰にも好かれない「自称前衛音楽」相手では経営も頭打ちになろう。政治になぞらえれば、極左から中道保守に変わったのである。そしてこの頃から雑誌の名称も「Neue Zeitschrift für Musik」と変った。これはシューマンの雑誌の名称である。何があったか知らないが、「自称前衛派」機関誌をやめた。けっこうなことである。その後、私はこの雑誌の購読をやめたのでいまどうなっているのか知らない。

ドイツは長い音楽の歴史と伝統を持っている。日本はそうではない。明治になり、はじめて西洋音楽を輸入し始めた。そして、第二次大戦という鎖国の時代があり、外国と世界の情報が遮断された。終戦後、この遅れをとりもどそうと懸命の努力がなされた。これは仕方がない。そのため、外国の最前線の情報動向を何がなんでも急いで取り込もうとした。昭和20年代のことである。古典ではなく最先端の動向である。軽井沢の「現代音楽祭」などはドナウエツシンゲンの音楽祭の恥ずかしくなるような真似である。しかし、それも当時としては仕方なかったであろう。恥も外聞もない。日本の国がたどった現代史のもたらした因果である。

そして、この過程で大きな役割を果たしたのが、評論である。「言葉」の世界である。だまって音楽だけを実践してればよかったのだろうが、そうはいかない。言葉の力が強力である。印刷放送報道と組んだ宣伝力は抜群のものである。この場で、日本の「音楽評論」は大きな役割を果たした。役割を果たしたといえればいいことのようにだが、達者な言葉で新聞雑誌と組み、一方的な価値観を喧伝したのである。戦後の闇屋企業をおもわせる。

こうした評論による音楽への踏み込みは「自称前衛派」だけではない。それに対する、ということで、「民族派」も出てきた。「前衛派」の独占を許すまじということで、民族派の作曲家と音楽を推進しようというのである。しかし、如何せん、両方ともまだ音楽の実体がない。実験テスト的な段階のものしかない。こういう状

況のもとで路線あらそいをすれば、観念的、理念的、実体なき路線闘争にならざるをえない。肝心なことは、どの傾向路線の音楽であろうと、出来が、いいものと、わるいものとのがある。観念的な闘争ではこれが別のものになる。相手の全面否定か自分の側の絶対的賞賛肯定である。行き着く果ては不毛な排他と独善でしかない。

「音楽」がなくて「言葉の評論」だけの世界ではこれが行き着く先である。さいわい戦後70年、こういう不毛な「言葉」独占の時代は日本でもようやく過ぎた。評論は本来の位置と面積に戻り、よき役割を果たしてほしいものである。

(すけがわ・としや)



【助川 敏弥 プロフィール】

1930年生。東京芸術大学作曲科卒業。芸大在学中、日本音楽コンクール第一位と特賞、1960年度文部省芸術祭奨励賞、1971年度文化庁芸術祭優秀賞、1973年度イタリア放送協会主催国際放送作品コンクール「イタリア賞」(NHK参加)大賞。1976年から1994年まで日本現代音楽協会委員。日本音楽舞踊会議機関誌月刊「音楽の世界」前編集長、2008年より日本音楽舞踊会議代表理事。

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/sukegawa/>

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆

音楽雑誌『月刊：音楽芸術について』

1946年に音楽之友社から発行された月刊の音楽専門誌。ターゲットを音楽専門家、および、一部のハイレベルの音楽愛好者に絞って出版された。記事として取り扱う範囲は、現代音楽、音楽教育、演奏など音楽全般に及んだが、特に現代音楽分野の記事が多く、その中でも前衛音楽を取り上げる記事が多かった。誌上で作曲家や音楽評論家が激しい論争を繰り広げることもしばしばで、NHK電子スタジオで制作された、諸井誠、黛敏郎の共作「7のヴァリエーション(制作年1955年)」を巡って、作曲家の諸井氏、別宮貞雄氏が激しい論争を繰り広げたことを、今でも憶えている。

『音楽芸術』誌は前衛音楽礼賛に傾く傾向が見られたが、毎月、現役の作曲家の楽譜を付録として配布するなど、新しい音楽の普及に努めるなどの功績があった。

しかし、音楽文化の大衆化の波が押し寄せる中で、クラシック音楽を主体としていた出版社の経営は苦しくなり、文化興隆のためという理念のもと、採算を度外視して刊行を続けたものの、バブル崩壊後はその継続が難しくなり、1998年には廃刊に到った。

(編集部)

音楽家と音楽ジャーナリズムについて

作曲：高橋 雅光

音楽ジャーナリズムにおける本誌の役割について

本誌「音楽に世界」は今年の４月号から新たに、“音楽家が自ら作る季刊誌”としてスタートするが、編集部員は全員“月刊から季刊になるが、季刊になった分、今まで以上に充実した誌面にしていきたい”。“他の商業誌では掲載できない情報や記事でも内容が良ければこれからも掲載していきたい。”“季刊誌になったが機関誌として会員の「声」をさらにきちんと反映していきたい”とその意気込みやアイデアは毎月の編集会議で大いに議論されている。

視点・論点その１－若い層の音楽活動

現在の音楽商業誌は、海外の来日演奏家の紹介やその関連記事及びコンサートの情報等、特に「広告宣伝記事」が近年さらに多くなってきているようだ。音楽の愛好者にとって現在の情報案内としては役に立っていると思うが、何か広告宣伝をお金を出して買っているような、おっ金え話しになっているようだが、音楽の専門性という点では記事が一般的なクラシック記事で、特に新しい内容がないような雑誌になっている。

そういう状況下にあって、本誌は音楽家自身の考えや活動・専門性を発揮した研究の成果等を５２年間にわたり、生の「声」を発信し続けている。

しかし、７０年代８０年代の音楽家は、割合自分の考えをはっきり述べたが、現代の音楽家はあまり自分の考えについて発信しない傾向がある。特に若年層にそういう傾向がある。なぜなのか。若年層の傾向と言えば、音楽団体に所属するよりも、気心が知れた仲間同士でコンサートを行う傾向があるが活動に広がりがない。それは演奏したいときだけ集まってコンサートを行うという自己満足をしたいのか、演奏会を開くときの経済的なことに原因があるのか、コンサートを数回開いただけで演奏会そのものから遠ざかっていく傾向がある。若者が音楽活動に夢を抱けないような音楽状況ならば、これは若年層の個人的な悩みとしないで、社会的にも問題にしなければならないことであろうし、そこに音楽ジャーナルとしての確かな視点を注がなければならないであろう。

視点・論点その２－どうする音楽大学

本誌が昨年7月号に「いま音楽大学を問う」という特集を組み、“予備編”として本会会員にアンケートを送り、その回答を掲載したが、本題の音楽大学の勤務者による座談会は延期になったことは記憶に新しいが、今の時代少子化により受験者数が激減している。現代社会の中に生きる音楽大学としてこのことをどのように考えているか、音楽ジャーナルとしても触手の動くところである。

この件について、少し触れたいと思う。1973年の子供の出生者数は209万人で、出生率は2.14（女性が一生に産む子供の数）だが、2014年には子供の出生者数は103万人で出生率1.43と、73年に比べ半数以下となっている。18歳年齢を考えると、今までもこれから18年後も、音楽大学へ行く人がどれくらいいるか推して知るべしである。

音楽大学も商売であるからには学生が一人でも多くほしいはずである。しかし、東京の音楽大学へ、近年では大阪以西の人は、大阪を越えて東京まで受験及び入学する人は、年々少なくなってきた。全体の減少数は上記の数値をみれば明らかであり、日本の経済状態があまり芳しくない状況も含めて、現在は音楽大学も経営の危機に立っていることと推察する。その割には、コンクールそのものが増えていて、応募者数も子供から社会人まで参加して、熱心な演奏が展開されている。

それが、なぜか音楽大学受験及び入学に繋がらないのである。その不安の原因の一つに、卒業後の就職に不安を抱く人が圧倒的に多い。それでも熱心に音楽大学を希望する人は、入学することがすべてなので、卒業後の事を考える事は後回しになるようではあるが、お尻に火がつく卒業間近には一般大学の学生よりも不安が広がるようである。

それにもまして、企業からの社会的評価はいまだに、音楽大学卒業は一般短期大学の卒業と同程度という見方をされている。それは西洋音楽を「学習」することが、社会の中の一般大学の教育を受けたことと同じということに、繋がっていかないのではないか。

音楽大学がこういう状況であるから、卒業後自宅で教室を開いても生徒が集まらない状態である。音楽大学がこういう状況を打開し道筋を作ることができれば、自宅で教室を開いている先生方のところにも、生徒が集まりやすくなり、良い循環を作るようにすれば、音楽大学にも生徒が集まりやすくなっていくことと思う。いずれにしても「音楽」と「大学」の学校改革が迫られている。

現在、世界の音楽状況をみても、音楽家にとっては厳しい状況下にある。イタリアでは歌劇場のオーケストラや合唱団の全員の解雇通達（10月通達～11月10%の減給により復活）や演奏報酬の減額等が行われており、本誌も音楽ジャーナ

ルとして、そういうニュースもホットなうちに掲載すること。会員の活動状況や専門的研究の成果・地方の音楽活動を掲載すること及び、地域に根差して活動されている方々や状況を紹介すること。現在の伝統音楽の分野の状況や活動も掲載する等、ジャーナルとして取り上げる事も時代が進むことにより、複雑多岐に渡っている。これらの視点・論点を明確にしなが、社会文化の一環として“音楽家が自ら作る雑誌”を、社会に発言し続けることが大切と思う。

(たかはし・まさみつ：本会 出版局長)



【高橋 雅光 プロフィール】

作曲を安達元彦氏、岡田京子氏に師事。管弦楽法をモスクワ音楽院管弦楽法主任教授のカレン・ハチャトゥリアン氏に習う。

第二回日本音楽集団作曲コンクール第一位入賞。1977年度作曲賞を受賞。'84年5月第二回モスクワ国際現代音楽祭に、故芥川也寸志氏、故寺原信夫氏等と共に、ソヴィエト文化省・作曲家同盟の招待参加。

(公社)日本尺八連盟主催全国尺八コンクール・オーディション審査委員。

(公社)日本尺八連盟委嘱作品尺八三重奏曲「絆」楽譜・CDが連盟より発売。現在、日本音楽舞踊会議理事・出版局長・楽譜出版部長・月刊「音楽の世界」誌編集委員。日本現代音楽協会会員。日本作曲家協議会会員。



《『音楽の世界』1月号の訂正》

1) 目次のページ 以下のタイトルが目次から落ちていました。八木宏子さんと読者に深くお詫びします。

リレー連載 未来の音楽人へ(19)

八木 宏子 22

2) P.23 写真2のキャプション

《写真2》 島田美佐子さん(左)と著者 → 嶋田美佐子さん(左)と著者

3) P.49 **音楽時評** 『ショパンの心臓』 最初の行

ショパンは1848年のフランス革命の翌年、1949年にパリで病死している。【誤】

↓

ショパンは1848年のフランス革命の翌年、1849年にパリで病死している。【正】

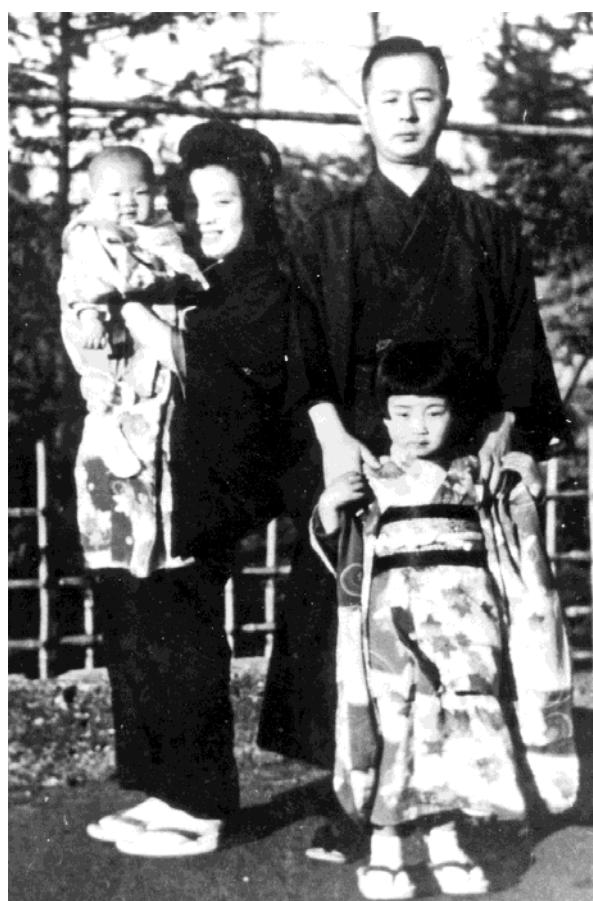
未来の音楽人へ（20）

三味線：杵屋 静子

1935年生まれ、亀戸天神様の裏にあった、三業組合（花柳界）～の検番で長唄の師匠をしていた父の許で「門前の小僧習わぬ経を読む」で始まった。が、17、8歳の頃、父から「静子！おしゃれにお金をかけたら楽器にかまえない」と云われた。この娘は芸で身を立てると父はその頃から見ているのであろうか？名取り試験を受けて芸名を戴いて8才年上の七代目家元杵屋勝三郎師にチャンスを与えていただいたが、いつも男性社会の男性並みに厳しかった。

《立（たて）三味線になった》

戦後の邦楽の将来を案じたNHKは、昭和30年に邦楽技能育成会を作り、一年間の学び舎になった。私は第5期に入り、中学校で止まっていた私には新鮮で、多くのことを見聴きし勉強になった。そして世の中はどんどん変わり、世界で現代音楽が流行、古典邦楽界では創作邦楽の会が出来、NHKでは邦楽器による現代邦楽の放送番組を作り、洋楽の作曲家に邦楽器を学ばせて作曲させ、指揮者を育て、育成会七期迄の卒業生の中から演奏者を選び、専攻科としてグループを発足した。毎水曜日練習、四週目には録音、毎月放送された。グループの中で一番勉強の足りなかった私は、皆さんがとても輝いて見えた。考えた末、杵屋正邦師に「足りないものがある」とお話ししたら、「気がついただけ偉い」と云って下さり、門下生にしていただいた、が楽典など少しもされず「実践で覚えろ」と云われ、個人的な先生の作品のお仕事を沢山させていただいたが、特別厳しかった。とくに、長唄のレパートリーは多いが、何の曲を演奏しても「君は何



昔の帝国ホテルの庭。ホテル内の舞台の合間、母に抱かれて

も無い」と云われ「何が無いのですか？」とお聞きしたら、「詩情もなければ絵心も無い」とおっしゃった。その頃はよく解らなかつたけれど、今は感謝の気持ちでいっぱいです。そして37才の時、リサイタルを開催するチャンスが訪れました。すでに、箏曲の友達はもっと若い年齢で開いておりましたが、長唄界では希なことでした。古典を2曲、現代邦楽を3曲で、その内の1曲は委嘱させていただきました。NHKのディレクター、故長広比登志氏のご紹介で中俣中喜男氏作曲「コントラス」で太棹と細棹の二重奏曲。太棹は鶴沢清治師。三味線の社会では極めてめずらしかつたか、長広比登志のプログラム上の文を記させていただきます。

これにこりずに

長広比登志

たいへんでしたでしょう。心からこの会が実現したことを、お喜び申し上げます。



名披露目用

日本の文化は、とくに江戸300年このかた、体制的な方向、官僚的な社会構造が続いております。この体制そのものは、いろいろな弊害を生み出したことは申すまでもありませんが、その最大なものの一つに、冒険ないし探検を拒否・排除したことがあげられましょう。この点に関しては、西欧世界に一步も二歩もおくれをとっているのではないのでしょうか。邦楽の世界も、徹底した管理社会であり官僚体制でした。今ようやく変わりつつあります。それでも杵屋静子さんのような活動には、幾多の障害があったと思います。それをあえて押し切れる世の中になったことを我々は喜ぶべきでしょうし、このこみ上げて来るエネルギーを抑圧するものに対しては、どんなものであれ、徹底的に反発しなければなりません

まい。この会が「もうこりごり……」と云う状態で終わることなく、余力を残して次への飛躍台となるよう祈ってやみません。冒険は創造を導き、創造は一つの文化を形作ります。次のリサイタルにも大きな期待をかけています。」

以上の有り難いメッセージを頂きました。

《本格的な仕事 came》

その2年後、2ヶ月の民音全国縦断公演に4年出演、1978年に成田新空港が出来た年の7月、カナダのロンドン大学で開催された音楽学会公演に参加、その2年後にドイツのボンで始まったヨーロッパ3カ国で、唄、三味線、日本舞踊各一人で公演旅行を60日余り経験した。40代、50代は世界の到る所で沢山のことを学ばせていただいた。一番に感じているのは、先に述べたカナダに参りました時、トロントの日本文化会館で公演前の越後獅子のリハーサルをしている時、ご年配のご婦人が入って来られ、席につくと、膝に手を打って興じて居られました。ご婦人は日本



フランス レクトゥールでパリ祭の前夜祭翌日公演
右が筆者

日本で三味線を習っておられたのだナ！と思い、感激いたしました。故あって世界中に日本人が住んで居られます。日本にある日本の自然や文化を絶対になくしてはいけない、守るのは日本にいる日本人だと思います。丁度その時、カナダ移民百年の年で、印刷ほやほやのご本を戴いて参りました。この感動が世界に行きたい原動力になりました。



杵勝会旅行で奥飛騨温泉近くで家元と

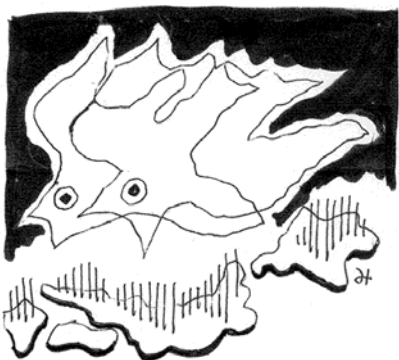
1972年に始めたリサイタルを1999年、第10回で終え、翌2000年から「巷に三味の音を」の願いをこめて。三味線ライブを始め、本年1月6日で56回を数えまし

光の春

— 七草粥にことよせて —

ジョウビタキの鳴き声で今朝も夜が明ける。庭の野茨の実も、紅シタンの実も、食べ尽されて、なんにもない。せっかく来たのにすまないね・・・、そんな気分で鳴き声を聞いている。

晩秋から初冬にかけて、シベリアや中国東北部より渡ってくるジョウビタキ。小さな木の実や虫を食べる、スズメほどの冬鳥だ。



冬鳥といえ
ば「唐土(中
国)の鳥」。
この鳥、季
節の伝承囃
子歌「七草
なずな」の
中に潜んで

いる。のぞいてみようか。

「七草(ななくさ)なアずな

菜切包丁(なっきりぼうちょう)

まアな板 唐土(とうど)の鳥が

日本の国へ 渡らぬ先に 合わせ

て バッタバタ」

旋律は不明だが、わらべ歌だ。日本童謡事典によると「正月六日の夜から七日にかけての七草行事にうたう歳時唄。この日は七日正月・七日節供ともよばれて七草粥を食べる習わしがあるが、粥に入れる七種類の菜をまな板の上でたたく時の儀礼的な唱え言葉を、いつの間にか子どもたちが覚えて歌うようになった。— 略 — (野村敬子)」とのこと。

この唱え言葉で七種の菜を調子良いリズムで刻む。とあるから、もともとリズムだけで節は無いのかもしれない。

歌の中、害鳥として飛来するのは「唐土の鳥」。それは?と尋ねれば、「宛て所に尋ねあたりません」とのこと。そのもたらす害、これまた漠然。どうもこの鳥、空想上のもののようだ。

それで

もなお。

「唐土の

鳥」が運

んできて

いたもの

こそ、鳥

インフルエンザ!などと言われるよう

にもなって。真偽のほどはともかく、「唐

土の鳥」はなんとも分が悪い。どうやら

島国日本、悪いことは外からもたらされ

るもの、としたいのかもしれない。まあ、

お祭りの行事の中のことであります

が。

さて、七草を摘み、粥にて食す正月行

事の原型は、遠く室町、平安の時代まで

さかのぼるらしいが、後にこの季節の行

事「鳥追い」と重なり、民間習俗になる

のは、江戸になってからだ。

それでは、七草粥を作ってみますか。

先ほどバッタバタの音高く刻んだ七草

は、同じみ「セリ、ナズナ、ゴギョウ、

ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシ

ロ」



「君がため春の野」に出たのは昔の話。今やスーパーの棚にパックづめで並んで、「若菜摘む」楽しみも苦労もなし。「わが衣手」を雪にぬらすこともないのだ。ことは簡単。それでは七草そろえたところで、ストントンと刻むこと49回。それを粥に仕込み、ことこと煮込めばできあがり。



七草粥は正月のごちそうで疲れた胃腸にやさしく、ついでに無病息災のご利益。さらに重ねて

ストントンと農作物を荒らす害鳥も追っばらう。ハウス栽培の七草でも、十分に春の野趣を味わえる。お試しあれ。

正月食べそこなっても、この行事、旧暦に合せば、2月の今ごろ。再度の機会だ。その時に、「七草なずな 唐土の鳥が日本の土地へ 渡らぬ先に ほーいほーい 出会うぬ先に すっとなん」のお囃子も入れて調理してほしい。これは信州安曇野に伝わるお囃子だ。

唱えて食せば必ずご利益、の保証はできないけれど、文化伝承の満足感や、ほどほどの笑いがもたらされるに違いな

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

【挿絵】武田 光弘(たけだ みつひろ)

い。当座の風邪予防にはなるかもしれないし。

ところで、最近つくづく思うことがある。「もしかして ドMなのかな 有権者」ということだ。

柳名、「唐土の鳥」ならぬ、「あげあし鳥」氏の作。この鳥、毎日新聞の中で見つけた。「ドM」とは、度が過ぎるほどのマゾヒズム。12月のわけのわからぬ衆院解散の、その結果を見ての感想か。



「この道しかない」と自らの言葉に酔うかのごとく政策を説く、日本国首相。「この道」とは？群羊のごとくつき従ってもいいものか？ホゾをかむようなことにはならないか。いずれにしても、国民の選択の結果だ。

風はつめたくも、光は春。「あげあし鳥」氏があきれる「ドM」の評価の鎖をたち切り、とかくおまかせの思考停止からも、そろそろ目覚めねばと思うのだけれど。

そうそう、ジョウビタキだ。中には渡りをやめて、一年中を日本で過ごすものが出てきたという。どういう加減なのか？ほら、また鳴いている。



ベートーヴェンの第 10 交響曲——というここでのタイトルは、じつのところかなりミステリアスである。クラシック・ファン、ベートーヴェン通の人なら、どんなことが書かれるか見当がつくかと思うけれど、素直に考えれば「彼の交響曲は、9 曲ではなかったかしら？」である。ひねって考えれば、第 36 回「ベートーヴェンには、もう一つの隠れた交響曲が」でご紹介した「戦争交響曲」のことだろう、と思う人もいるに違いない。それでもなく、まだ 2 つほど関係ある曲があるのである。

一つは、実際にベートーヴェンが考えていた 10 番目の交響曲である。完成はされなかったが、そのためのスケッチ断片があれこれと残されていて、これを丹念に調べ、ベートーヴェンの作曲手法なども研究しながら第 1 楽章だけを再現した、という学者がじつはいるのである。1949 年生まれのイギリスの音楽学者バリー・クーパーで、彼はベルリンとウィーンに残されているスケッチ・ブックからその断片を選び出すと、独自の考えに基づいて見事に復元。1988 年 9 月に CD 化（ウィン・モリス指揮ロンドン交響楽団・自身で解説）するとともに、10 月 18 日にはロンドンのフィルハーモニック・コンサートで世界初演（ウォルター・ウェラ指揮ロイヤル・リバプール・フィルハーモニー管弦楽団）を行なった。筆者もその CD を聴いたが、アンダンテで始まり、アレグロ、アンダンテと変化

する 20 分位の曲で、中心主題は「ピアノ・ソナタ第 8 番〈悲愴〉」の第 2 楽章とほとんど同じである。これに「第九」交響曲ふうの断片が現われたりして、確かにベートーヴェン風ではある。しかし重厚さや迫力には欠け、マニアの話題になったものの、以後忘れられてしまったのも仕方がないような気がする。

もう一つは、ベートーヴェンとは別人のヨハネス・ブラームス（1833～1897、ドイツ）の「交響曲第 1 番ハ短調作品 68」である。この曲がなんと「ベートーヴェンの第 10 番」と呼ばれたことがあるのである。CD などを買うと、その解説には必ず出てくるから、ファンの人なら既に知っている人が多い筈である。

なぜか？それを言ったのは、ピアニストであり職業指揮者の元祖ともいわれるハンス・ビューロー（ドイツ）なのだが、要するに「ベートーヴェンの 9 曲につづく名作である」という意味である。単なる誉れの言葉といえはそれで終わってしまうが、もう少し曲のことを知ると、「なるほど！確かにそうだ」と納得できるだろう。輪郭などを、ご紹介してみよう。

ブラームスが同じ国の先輩としてベートーヴェンを尊敬し、彼と同じような作品、作風を追及したことはよく知られている。オペラは一作も書かなかったし、リストやワーグナーのような派手さも彼の好みには合わなかった。標題音楽よ

りは、交響曲や協奏曲、室内楽曲、ピアノ曲、歌曲、宗教曲などに中心をおき、あくまでも内省的、精神の内面へ向かって情熱を燃やす。そういう姿勢で作曲を行なったのだったが、特に交響曲についてはベートーヴェンを強く意識した。

「同じものを書くのなら、彼に負けないものを！彼を超えるものを！」。そのために、最初の交響曲には、なんと20年もの歳月をかけているのである

思いついたのは1855年、シューマンの「マンフレッド」序曲を聴いた時だったといっているが、ともかく書いたり消したりしながら「交響曲第1番」が完成したのは1876年になってである（もちろん、その間に他の曲が挿まってはいるが）。じつに20年以上。亀の歩みにも似た根気よさである。

出来上がりが、初めてとは思えぬすばらしさであったのは当然であった。力強く堂々とした始まりから、哀愁感にみちた第2楽章、軽快ながらも美しさと淋しさを漂わす第3楽章を経て、高らかに勝利をうたうような終楽章まで、全体はよどみなく流れてなおかつ重厚感がいっぱいである。オーケストラの響きは豊かで、美しい旋律もあれば、ブラームスらしい内燃する情熱もある。

しかしまた一方では、ベートーヴェンを意識しすぎたせいか、いろいろな点で彼の作品に似ていると指摘され、それがこの曲の人気にひと役買っているとい



ブラームス第1交響曲第4楽章のうちで、特にベートーヴェンの第9の第4楽章との類似が指摘されている部分。

えなくもないのである。それは管弦楽の使い方がベートーヴェンのように地味であること。第1楽章から第4楽章への運び方が、ベートーヴェンが目ざした“暗黒から光明へ”の精神的闘争をそのまま受け継いでいること。第1楽章が序奏のあとに出る短い基本動機から出来ている点。そしてまたハ短調という調性なども、まさに第5番「運命」にそっくりであること。さらに第4楽章の中心主題も、第9番「合唱つき」の〈歓喜の合唱〉に酷似していること——などなど。ここまで指摘されると、あらためて聴いてみよう、と思う人が多いのではなかろうか。

.....
【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



【連載】

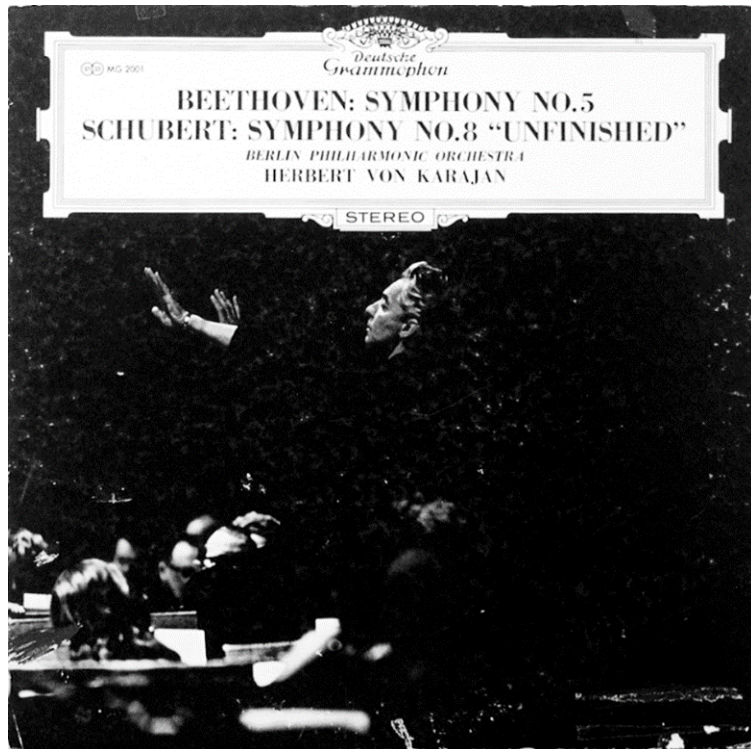
音盤奇譚

板倉 重雄

第 61 回

佐渡裕指揮の「運命／未完成」

「運命／未完成」と言えば、LPレコード時代の定番カップリングだった。現在のCDは円盤の片面にだけ信号を記録して約80分の収録時間をもつが、LPは両面に音溝を刻みこむことで片面約30分、両面で約60分の収録時間をもっていた。従って、AB両面で関連性のある楽曲、もしくは対照的な性格の楽曲を裏表に配することが多く、メンデルスゾーンとチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲、シューマンとグリークのピアノ協奏曲など、定番カップリングが存在した。中でも「運命／未完成」はクラシックLPレコードの王様だった。1964年に日本では11種類の「運命／未完成」のLPが存在した。そして1965年に発売されたカラヤン指揮ベルリン・フィルの最新録音による「運命／未完成」は爆発的な人気を呼び、以後15年に渡って、日本のクラシック・チャートのトップを争い続けた。筆者も9歳のとき、大叔母にこのLPを買ってもらい、演奏や録音の素晴らしさに感動したことが、その後の人生を決めてしまったのである。



MG2001 1971年5月11日に買ってもらった現物

ところがCD時代に入ると、レコード会社にとってのドル箱だった筈の「運命／未完成」は激減してしまった。理由は定かでないが、CDになって収録時間に余裕ができたこと、片面収録となり名曲2曲をAB両面に配する妙味が無くなったこと、あまりにもポピュラー過ぎて演奏者もレコード会社も気恥ずかしくなったこと、などが想像される。

そこへ登場したのが2014年最新録音の佐渡裕指揮ベルリン・ドイツ交響楽団による「運

命／未完成」である。「題名のない音楽会」の司会を務める世界的指揮者が銜いなく王道名曲に挑んだことにすっかり嬉しくなってしまった。しかも録音会場はカラヤン盤と同じベルリン・イエス・キリスト教会である。モダン楽器、モダン奏法に

よる響きも充実しきっている。そして筆者はこのCDを聴いた若い耳が、一生クラシック音楽の魅力から離れられなくなることを期待しているのである。

●ベートーヴェン：交響曲第5番ハ短調 Op. 67 《運命》 ●シューベルト：交響曲第8番ロ短調 D. 759 《未完成》 **【写真：前ページ】**

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
[グラモフォン MG2001] (LP 廃盤)

1962年3月(運命)、1964年10月(未完成)の録音。《未完成》は当時、交響曲第8番とされていた。筆者は1974年5月15日に、大叔母にこのLPレコードを買ってもらった。

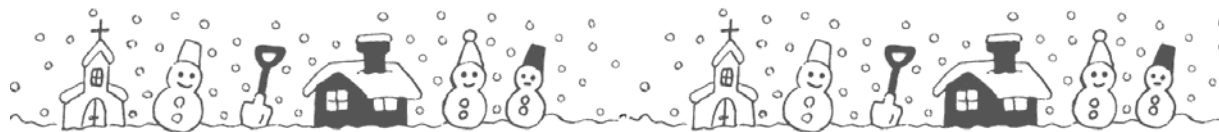
●ベートーヴェン：交響曲第5番ハ短調 Op. 67
《運命》 ●シューベルト：交響曲第7番ロ短調
D. 759 《未完成》

佐渡裕指揮
ベルリン・ドイツ交響楽団
[エイベックス AVCL-25862] (CD)

2014年2月録音。SACDハイブリッド盤(通常のCDプレーヤーで再生可能)で録音も素晴らしい。《未完成》は最新の研究に倣い第7番と表示されている。



【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月、「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」(アルファベータ)を上梓。現在タワーレコード株式会社商品本部勤務。





人・アート・思考塾（10）

作曲 小西徹郎

音以外の要素と空間

ここ最近、仕事で音楽以外の部分も手がけることが多くなった。以前から音楽と空間、音楽以外の要素との関わりは常にあったが、特にここ最近では音楽以外の要素とのつながり方について深く考えるようになった。基本にあるのは「音は視覚を奪う力を持っている」ということだ。意図して視覚を奪うこともあるが多くの場合は視覚と音のバランスやタイミングを即興であっても計算をする。「音は視覚を奪う力がある」このポイントは「音量」である。あまりにも大きすぎる音量や衝撃音はその音が鳴っている時間は視覚が鈍るのだ。これは日常生活の中でも経験があるだろう。つまり意識の奪い

合いになるのだ。そんな経験を現場でしながら感覚は鍛えられていった。私は基本的にぎっしりと音が詰まった音楽を好まない傾向があるのでそのことが空間を見定めていくことにつながったのかもしれない。

先日、眠りをテーマにした香り（お香）と絵画と音楽のコラボレーションライブを吉祥寺の「おくに」というスペースで行った。このスペースのオーナー小林治香さんがインセンス（お香）ブランド「おくに」を立ち上げたことがきっかけでこの公演のプロデュースやアートディレクションを行ったのだ。スペースはビルの7Fにあり、壁面の半分以上がガ

ラスという空に近い空間だ。本誌連載のイラストやロゴを描いてくれている前川さんの絵画も展示しながら、またオマーン産の乳香、フランキンセンス、ミルラ、キフィの3種類を焚いた。豊かな香り、眠りがテーマの絵画、そして私の音楽で空間を作った。観客は靴を脱いで床に座布団や枕を腕に寝そべりながらリラックスして空間を楽しんだ。公演後はトークショーと目覚めのハーブティーを用意した。

今回は更に舞踊を取り込もうとしている。舞踊は人物画の中のポーズで始まりポーズで終わる。絵画の中から人がすり抜けてきたようなイメージだ。先日は衣装も決めて企画を進めている。もちろん香りもある。今まで3つの要素だったのが今回は4つに増えることになる。ここで私はいろいろ思いをめぐらせた。

「増やしすぎてはいけない要素」

要素は増やしすぎてはいけない。これは私の空間における基本的な考えである。ところが舞踊というもうひとつの要素をどうしても入れたい、そう考えたときにどうすれば雑多になることなく良い空間が作れるのか？ここはとても難しいところである。そこで思いついたのは絵画中のポーズの時間を長くとり、可能な限り絵画と舞踊との一体感を出す演出をすること、そして動きを最小限にとどめること、動きの速度を可能な限り落とし絵画との一体感の中から生まれてきた舞踊を説明するのではなく「示す」この3点だ。また、衣装のフォルムや質感と色彩についても気を配った。今回の舞踊の衣装は上下が白で、パンツに関してはダンスの練習着によくみられる裾がフレアになっているものを採用し、上には薄手で透過した素材のものを羽織ることにした。何故白なのかという

と、会場では眠りがテーマのため照明が暗くしてあるからだ。白の衣装は動きの本質的な部分をしっかり観客に伝えることができる、ここが大切なポイントなのだ。また、素材の質感は光沢があるものを使用する。何故なら薄暗い中にも光はあり、その光が光沢素材に映りこむからだ。そのことによって観客への視覚情報を美しく伝達することができる。そして更にとっても大切なことは「音楽は舞踊を意識してはならない」ということだ。何故なら音楽と舞踊が同調しすぎると香りの存在感は観客にとって意識としては薄くなってしまいうだろうし、絵画と舞踊との一体感は壊れてしまうからだ。常に Tutti では空間は壊れてしまう。音も音以外の要素も旋律になったり副旋律になったりあるときはリズムになったりハーモニーになっていく。香りも舞踊も絵画も共に作っていくことが大切なのだ。

「自由度を高めるために」

このように、空間に対して今まで可能な限りそぎ落としながらも豊かにすることを考えてきたのだが、ここにきて自由度を大切に始めて少し考え方が変わった。当然基本になる考え方については揺らぐことはないのだがすべてを雁字搦めに縛って串刺しをするのではなく、各ポイントをおさえながら、車のハンドルの“あそび”のように各要素と空間をやわらかい糸で結ぶ程度のほうが更に良さが増幅していくのではないだろうか？と考えている。縛りをきつくしたり緩めたりする連続の中で良き空間は更に良くなっていくのだ。

こにし・てつろう 日本音楽舞踊会議理事
タイトルロゴ：前川久美子

(日本出版美術家連盟 賛助会員)

高等教育機関とハイブリッドオーケストラ^{注-1}

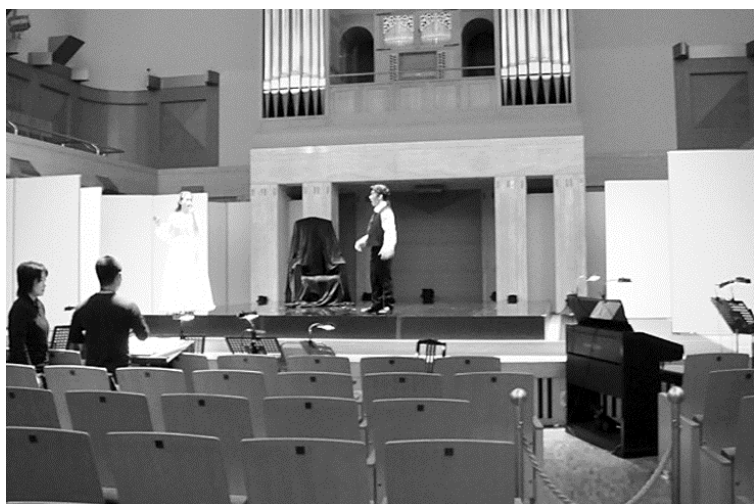
—日大芸術学部音楽学科、浜松学芸高校芸術科—

研究：阿方 俊

1月7日と10日、全日本電子楽器教育研究会（ヤマハ音楽振興会）が音楽大学・音楽高等学校の電子オルガン講師を対象とした担当者会議を開いた。この会議の主旨は、産学協同の観点から情報交換を行い電子オルガン界の発展に寄与することにある。ここでの活動報告の中でハイブリッドオーケストラに関するものが多くあり、その関心の高さを示した。今回は、先月号の「劇場におけるハイブリッドオーケストラの現状」に続き「高等教育機関で行われている実践」をレポートしたい。

日本大学芸術学部音楽学科声楽コース

ここでは毎年オペラのハイライト上演を行っており、去年は45周年を迎えている。この大学が最初にエレクトーンを使ったのは、1990年代、丹羽勝海、渡辺薫教授がプッチーニの「修道女アンジェリカ」、また神野明教授がグリーグの「ピアノコンチェルト」で共演したころにまで遡ることができる。ここ10年は、エレクトーン奏者の西岡奈津子さんと指揮者の江上孝則さんがハイブリッドオーケストラでオペラハイライト上演に関わっている。演目は、モーツァルトの「魔笛」「コジ・ファン・トゥッテ」「フィガロの結婚」、ドニゼッティ「愛の妙薬」などの再演を含めたものが定番となっている。



(カザルスホールでのエレクトーン=右端)

ハイブリッドオーケストラは、弦楽器5名(VI×2, VI, Cel, CB)にエレクトーンとチェンバロが加わったものが主体で、エレクトーンは管楽器および打楽器パートを担当している。この演奏形態は、先月号の大型のハイブリッドオーケストラと異なり、管打楽器代用型とでもいえるものである。この小編成の演奏形態は、日本大学カザルスホール（483席）や平成23年度から用いられている練馬文化セン

ター小ホール（592席）のような小規模な会場に適している。

注-1 ハイブリッドとは異種混合の意味で、ここでは電子楽器と伝統楽器のアンサンブルをいう

浜松学芸高等学校

この学校のハイブリッドオーケストラについては、昨年の3月号で「一高等学校の域を超える浜松学芸高等学校音楽科一」というサブタイトルで学生によるハイブリッドオーケストラのレベルの高さと特長をレポートした。今回は、全国ではじめてと思われる教員によるハイブリッドオーケストラを紹介したい。

昨年11月、音楽課程設立50周年を祝して教員による「第17回信愛コンティヌオ」と称したコンサートがアクトシティ浜松中ホール(1,030席)で開催され、満員の聴衆の鳴り止まぬ大きな拍手に包まれた。

プログラムは、第1部と第2部がピアノ伴奏による歌と器楽で、第3部が「50周年記念アンサンブルと共に」というサブタイトルがついたステージ。このアンサンブルこそまさにハイブリッドオーケストラ(VI×2, VI, Fl×2, Ob, Hn, Sax, El×3, Pf.)と呼ばれるものである。曲は、モーツァルト「4本の管楽器のための作品」、ガーシュイン「ピアノ協奏曲 in F」、ガーデ タンゴ「ジェラシー」、ロウ「マイ・フェア・レディ」より2曲が演奏された。指揮・編曲は宮本賢二郎教諭。



タンゴ「ジェラシー」 VI. 杉山久美



ガーシュイン「ピアノ協奏曲 in F」 Pf. 前田勇佑

ハイブリッドオーケストラの基本原則は「ヴァイオリンやフルートなどアコースティック楽器はマイクを使わない生音で、電子楽器はスピーカーと直に接続する方式でオーケストラと同じように音像の一致を求める」ことにある。しかしここでは、エレクトーンの音響をより豊かに聞こえるようにサラウンドプロセッサー(SR-50)を使用していた。写真右上からもその一端が伺えるが、左右のスピーカーに加え、後ろの左右にサラウンドスピーカーとセンタースピーカーが用いられている。また、電子楽器のステージ特有の配線が整理されてすっきりしたステージも見た目に自然でよかった。

今回、日大と浜松学芸高校の教育現場における実践を紹介したが、これらは今後いろいろな演奏形態で広がっていくであろうハイブリッドオーケストラのひとつのあり方を提示しているものではなかろうか。

(あがた・すぐる 本会研究会員)

歌の道・我が音楽人生 (12)



～プロ室内合唱団「日唱」と共に半世紀～

室内合唱団日唱代表久住 祐実男

第1部<音楽大学時代> X II

日唱のデビューコンサートは1963年9月17日共立講堂に決まった。特筆すべきは、全曲指揮者無しの演奏だった。この半年と言うもの練習に明け暮れる日々だった。とくに思い出すのは、神奈川県の大山での1週間の合宿だった。みんなの気持ちは意地でも絶対に成功させる、の一つだった。この意地には秘話が隠されていた。

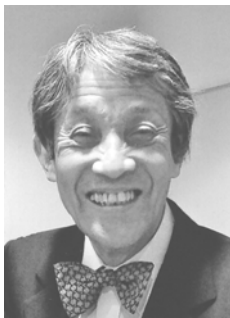
今だから話せるだろうと思うので実名を挙げてしまうが、デビューコンサートの指揮者に若杉弘さんをお願いすることに彼の了解も得ていた。ところが1週間後若杉さんからキャンセルがきた。我々はすぐピンときた。彼のマネージャーからの横槍で、東混を脱退したグループの指揮はするなということではなかったかと、我々は考えざるを得なかった。

そこで「ようし！それなら指揮者無しで歌おう。本当のアンサンブルを追求して見よう」と奮い立った。当時の合唱としては初めてのことで、日唱の周りの音楽家の方達も賛同して下さった。結果は大成功で、この指揮者無しの演奏はこの後日唱の伝統となった。このコンサートではダフ屋も出て、2千人の共立講堂が満席に見える程一杯になった。実際には1,300人の入場者があった。

その後の仕事も順調で、毎日が放送局廻りで忙しかった。ここでも実は指揮者無しの訓練が役立った。テレビの仕事はその場で楽譜を渡され、何人かで歌ののだが、とくに指揮者はいないので自分達でアンサンブルをしながら本番になることが多かったからだ。こうして局の信頼を得て、仕事は増える一方だった。

ところで、日唱の発足時に、株式会社にして、給料を出そうということにした。月2万円と仕事をこなした割合で給料を支払う事にして、安いながら生活を安定させる事にした。仕事が多かったのをそれを保つことが出来た上、決算では株主配当まで行なった。社長だった私は節約を重ね、余分な出費を押え、経営の手綱を引き締めていた。

10年が夢のように過ぎた。その間毎年社員旅行に行ったり、合宿まで実施した。しかし私はいつまでこの状態が続くか不安になっていた。そこで、発足3年目から始めていた子供の合唱とアマチュアの合唱を教える音楽教室が順調に育っていたことから、音楽教室を独立させ、将来の日唱の支えになるようにしようと考えた。音楽教室をしっかりとした物にするため、麻布十番に友人の助けを借りて教室を開設し、暫くは私が音楽教室の運営に専念する事にした。ここから日唱の苦難の道が始まろうとは夢にも思わなかった。(つづく)



久住祐実男 (くすみ・ゆみお) プロフィール

東京藝術大学卒業。在学中は声楽をリア・フォン・ヘッサートに師事。指揮法を渡辺暁雄と山田一雄に、和声法を下総皖一と石桁真礼生に師事。卒業後は指揮と和声法を小船幸次郎に師事。1963年、仲間20人で、究極のアンサンブルを目指してプロ室内合唱団「日本合唱協会(日唱)」を創立した。1973年には音楽教室「日唱ミュージックアカデミー」を設立し、クラシック音楽の普及に努める。現在日本合唱協会代表及び指揮者。日唱ミュージックアカデミー校長。日本演奏連盟会員。

《明日の歌を》— 楽友邂逅点ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第十一回 五感の季節……1997年秋からの呼び声(3)

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら
発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

十一回目は、「五感の季節」について。随想あるいは自由筆記の感覚で記したい。



■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会議理事）

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。

■旅のスタイル

思えば旅のスタイルは至ってシンプルだった。航空券は、ドイツ・フランクフルトからヨーロッパへ入り、イギリスのヒースローから欧州より出る分のみ。その間は這ってでも移動しろ、移動しなければ帰れない。それだけだ。旅の供に用意したのは、行った先々の国鉄の乗り放題の「ユーレイルパス」とトーマスクックの時刻表だった。

夜行列車、国際列車で、新しい国、街につく。早朝の光の中まずする事は、新しい通貨に両替する事。そして重たい荷物をコインロッカーや預け場所に放り込む事からすべては始まる。それから、どこに行こうか、何をしようか、駅で珈琲を飲みつつサンドイッチを頬張りながら決める。

20代前半といえども、2、3日夜行列車で旅すると体が痛くなる。疲れたら、その日は適当にユースホテルを探して予約して、泊まり、疲れをいやす。そしてまた夜行列車、国際列車の旅だ。最終の国際列車をイタリア・ローマで逃し、当初フランスへ行くつもりだったが急遽、数分後に出るスイス行きの国際夜行列車に変える等、国の移動も思いつくままだった。

ツアーや友人同士の旅なら、予定もあろう。目的地も厳密になろう。しかし一人で無計画放浪の旅となると、その点自由であるが目的は自分で探さなくてはならない。一人の気楽さも、孤独も困難も、全て背負わなければならない。単純な話、何時も荷物を一切合切持って移動せねばならず、ちょっと席を外すなどという程度のことも許されない。この程度の不自由はいつもついてまわる。しかしその内、気にならなくなってきた。大体、どんな旅だって、程度の差はあれ自由も不自由もある。不平を言っても始まらない。

■根本を掴む旅

旅に出た理由の一つに、大学で、西欧哲学や思想史を勉強していたことがあった。その思想の生まれた土地に立ちたかった。空気を吸ってみたかった。特に、ローマ市内にあるヴァチカン、サン・ピエトロ大聖堂は必ず立ち寄ろうと決めていた。今思えばそのヴァチカン到着は、全くの偶然だが旅の全行程の丁度クライマックスのような位置にあった。

西洋史は、2000年間、その賛否は色々有ろうが、キリスト教文化の影響によりその多くが成り立ってきた。美のテーマがロマン主義の誕生まで、聖書を題材にした画題や素材で出来上がっている。ヨーロッパに限定して旅をしても、無数にある建築物や美術館、美術品、そして音楽を体験する時間はない。学び切れない。おそらく生涯かけても全て体を通すことは出来ない。ならば、その中心を、全ての根本を見る事をしたかった。一つの文化の、文明の泉の湧きいでる場所を知りたかったからだ。そう、限られた時間の中、枝葉末節ではなく、文字通り根本を掴む旅にしたかったのである。

■墓所でたたずみつつ

そう云う意味では、音楽家の墓巡りもそうだった。彼らが生活してきた街や場所を見て回るには、作品を全て知り尽くすには時間は足りなさすぎる。それならば、その人の最後の地、墓所で、静かにその地面の下にいるその人を感じて想うのが、真摯で、何にも代え難い人生経験になるだろうと当時思ったのだ。

人類史に音楽遺産を残した作曲家たちが、実際に、無言で目の前の地面の下に眠っている。そう思うだけで、涙があふれるような感動に何度包まれた事か。そして墓の前で、時間を忘れてたたずむ。時間を忘れて墓を幽鬼のように巡るようなこんな酔狂な(?)旅は、ツアーや友人同士では、なかなか体験出来ない。自由気侷な、独り、放浪するからこそ気楽に出来たことかもしれない。

ドラマチックだったのは、作曲家グズタフ・マーラーの墓を尋ねた時であった。マーラーは10代初めの頃に好きになり、自分をクラシック音楽の、さらに作曲家への道に導いた作曲家。どうしても尋ねたかった。しかし、墓の位置は知らない。今程、情報も無い。ただ、ウィーン郊外の、グリーンツィングにあるとしか知らなかった。とにかくグリーンツィングに行った。ここまで来たんだ、行くしか無い。行ったらなんとかしてみよう。そんな思い一つだった。

……今のようにNetもモバイルも十分なガイドブックも無く、それで良く墓の前まで辿り着いたものだと、今もって不思議でならない。ただ、道行く人に聞きまくった、必死だった自分を思い出す。言葉もろくに解らないのに。

辿り着いたのは、墓地の閉園1時間ほど前。文字通り、頭の中が万感の思いでいっぱいになり、墓の前で、閉園時間を超えて1時間半ほど言葉を忘れてたたずみ続けた22歳の青年、私の姿がそこにあった。そして長い沈黙の時間の後、作曲家として一生を生きてゆく決心をした。名残惜しかったが、日没とともに墓所からようやく離れた。おそらく、墓地の管理人も、時間を過ぎても何も言わずにそのままにしてくれていたのだろうと、今、思う。

■旅をする理由

旅のクライマックスは、突然に訪れる。「ああ、この瞬間を味わう為に、放浪していたのかもしれない」という思いがわき上がる。

それは、グズタフ・マーラーの墓の前での一時間半の祈りにも似た時であり、ヴァチカンの聖堂の頂上から観た、偶然ローマの街に雲間から差し込む「天使のはしご」の光であり、閉館時間を過ぎたエッフェル塔の真下で、登れなかった塔を見上げながら飲んだビールの味であり、イギリス、夜行列車で着いたエジンバラでの早朝の、日常の景色であり……。



人にはどうということはない瞬間かもしれないが、**旅の途中、とある駅に**この瞬間こそが、この旅のクライマックスだ、頂上だ！」という心の底から叫びたい思い。そしてあとはそれをどう心でまとめて下山してゆくか、というさびしさ。こういう波が、一人旅の途中、忘れた頃にやって来る。

でも、本当は、自分も知っている。旅の目的地なんて、どこにも無い。目的地は、旅の理由ではない。ただ、こうして、五感がふるえるような経験を自分の中に通したい事。感受性のままに、生を受けとめる事。そうして自分が、これからの人生、どうやって未知の中を歩いてゆくか、自分の歩きグセを知りたかった。そのための無計画の一人旅、放浪だった。

無計画一人旅は良い事ばかりではない。こういう放浪の旅は、他に大切なものを見られなかったり、見落としてゆく旅でもある。あらかじめ計画し、分刻みの予定表できちんと動く旅の方が、ミスも少なく、効率良く多くの事を経験出来るだろう。そう云う意味では、多くの失敗を重ねた、みじめで格好悪い旅であった。

だが、自分が歩いて見たもの、選んだものが正解の旅とも云える。数多くの事を頭で知るだけでなく、自分の五感が何かを納得してから次に行くのが、自分の旅のスタイルだと知った。だからこそ、見たものに、そして見られなかったものに対して、何の後悔も無かった。

※ 次回は「五感の季節……1997年秋からの呼び声（4）」最終回「鉄路のかなたに」

日本音楽舞踊会議声楽部会公演

2015 年新春に歌う…夢と希望と、そして…

多種目団体である本会、日本音楽舞踊会議の声楽部会の連続公演シリーズである。例年恒例となった声楽部会の企画で、マチネ公演の型をとり今回も午後の時間帯で催された。

企画の内容と意図は、通称される「ファミリー・コンサート」である。日本と外国のひろく、そして永く知られてきた曲を楽しもうという方針で組まれた。

会員であり、練達の歌い手で、語り手でもある佐藤光政が今回も司会と進行を演じた。

曲目は、最初に佐藤の歌で、「さくらさくら」、「さくら横ちょう」、「荒城の月」。そのあと中村貴代の歌で、「花嫁人形」「草笛」「とんび」「渚のうた」「旅人の唄」「城ヶ島の雨」、ピアノは中嶋祐子。次は、「霧と話した」「未知の扉」、ヘンデル「リナルド」から、モーツァルトの「私はどこへ」、以上、小室由美子の歌、ピアノは服部信子。続いて、高橋順子の歌、石橋美知子のピアノで、レオン・カバレロの歌曲「パリアッチ」の「鳥のうた」など。ここまでが第一部。

第二部は、浦富美と渡辺裕子の歌で、島筒英夫の作品、金子みすゞの詩による「蜂と神さま」から11曲が、作曲者島筒自身のピアノで。同じく金子みすゞの詩による、助川敏弥作品、歌曲集「夕顔」が笠原たかの歌、亀井奈緒美のピアノで。最後は内田暁子の歌で、橋本国彦の「お菓子と娘」ほか外国のオペラ作品から数曲が演奏された。曲目のあと、会場参加で「さくら さくら」が歌われ、新春のコンサートらしい演奏会のひと時であった。

いずれも、日本では永い間、ひろく世代を超えてたしまれてきた歌であり、新年のマチネにふさわしいひと時であった。

注目すべきは、第二部の島筒作品であった。作曲者自身のピアノ演奏により、この作曲者の作品に、かねてから完熟した二人の歌の貢献もあるが、作品は作曲技術的にも評価賞賛すべきものであることを要記したい。この作曲者は、旋律だけを思いつく、いわゆる「ソング・ライター」ではないことを示した。「composer」、「作曲家」として「音を構成する」ことを実現していた。このことを特記しておきたい。

「みすゞ」の詩にしたがい、簡潔にして洗練された曲作りであったが、単なる旋律

公益社団法人 日本尺八連盟 全国演奏大会広島公演を開催する

日本尺八連盟は今回で第6回目を迎える全国演奏大会を広島市の上野学園ホール（旧郵便貯金会館）で12月14日に開催した。

全国規模で催されるこの大きな演奏大会は3年毎に行われ、今回は初代日本尺八連盟会長で人間国宝の、故島村帆山の13回忌にあたり、追善演奏会を兼ねている。

6時間半にもわたるこの大規模なコンサートは、広島支部長の岩城明山氏を始めとする会員全体で取り組み、それを京都の本部が後押しをするという形で準備が進められ、当日は来場者数も1,000名を越え、長丁場のコンサートであったが公演の始めと終わりでも、来場者数がほとんど変わらないという盛況のもとでコンサートは終了した。

この公演の成功の要因は、何とんでも広島支部会員の成功に導くという信念と頑張りが大きいことと、その背景には3年前の東京での、すみだトリフォニー大ホールで行われた第5回の全国演奏大会で、開場前に長蛇の列ができるほど来場者が並び、1,800名の客席数を満席にするという実績が大きく影響を及ぼしていると思います。

公演を催すということは、聴いてくれるお客様あつての公演であり、主宰者や演奏者にとっては、多くの人に聴いて頂き喜んでいただく事、心を豊かにしていただく事、このことがこれからの活動の継続に繋がっていく基やエネルギーとなるので、これからも自らの演奏技術を向上させ、その洗練された演奏技術により、邦楽及び都山流尺八の伝統の重みを尊重し大切に、またそれを切り開き、現代の一般的な音楽に聴きなれた聴衆にも、尺八及び尺八音楽の素晴らしさを心で感じ納得してもらえるよう、新しい音楽分野の開発と尺八道に精進されることを期待します。

この公演は、これからも進むべき3つの方向と方針を示しているように思います。

第一は、伝統の尊重と洗練で、普化宗の法器としての尺八の伝統を生かしながら、都山流尺八本曲独特の内容である、物語性のある「語り物音楽的な要素」と、具体的に奏法上では、基本的に音の太さと発音のよさ、及び音色の微妙な変化（この微妙な音色の変化が、本曲の語り物的な内容に色合いを着け、本曲を音楽的に豊かなものにしている。）

等、この土台の上に洗練された尺八音楽を語ることです。

第二は、新しい音楽や他の分野の音楽との結びつきにより尺八音楽の魅力を引き出すことです。坂田会長はイノベーション（新しい魅力）という表現をしていますが、伝統は大切なことではありますが、その世界だけに留まっていたら、尺八及び尺八音楽に一般大衆への広がりがなく、固定化して発展性が乏しくなる（つまり自らの首を絞めることに繋がります）。どの音楽の分野も、常に現代（一般大衆や文

化)の人々の心と結びついて、始めて発展性が得られるのであります。歌舞伎等の役者の活動を観ていても、伝統を基本に今を大切にしています。

第三は、現代の聴衆に心から喜んで戴けるような、邦楽普及活動と後継者育成でしょう。いつの時代も人々は喜怒哀楽の心を持ち、その心を癒やされることを望む以上、多くの人々が聴き易く、親しみやすい新しい尺八・邦楽作品のレパートリーを増やすことも大切であります。その作品も子供たちが聴いても楽しめるような入門編位から、大人が聴いても十分納得して頂けるような、重厚な作品まで多様なレパートリー作りが必要でしょう。

それと、本来的な普及活動というものは、聴衆が聴いて楽しむというところから、自分でも尺八を吹いてみて、その楽しさや良さを実感してみたい、その楽しさを他の人々と共有してみたいと思う能動的な心を持てるように聴衆を育てることが大切です。これが子供にも大人にも共通する後継者育成と繋がる道であると思います。尺八連盟の会員の方々も自らを振り返ると、思い当たる点があるのではないのでしょうか。

この公演の大成功の裏には、前述した「伝統+現代」の方向があったからではないのでしょうか。それを実感できる公演であったと思います。

では、坂田誠山会長のこの公演を迎えた言葉とプログラムを観て行きましょう。

坂田会長は、これからの尺八界や邦楽界を背負って立つ日本尺八連盟の方向について、「イノベーションとマーケティング」という“新しい魅力を築きながら他の世界とも繋がっていく”という方向を打ち出しました。また、“イノベーションとは必ずしも新しい作品の創造だけに力点を置くのではなく、伝統音楽をも含めたすべての面でイノベーション(新しい魅力)が必要ではないか”とも話しています。このことは「現代に生きる邦楽であり、現代をも生きる邦楽」という力強いことばで、現代に生きる伝統を生かす工夫の大切さを実感する言葉です。

尺八を吹かれる方が、古典や本曲を極めたいと思う心は大切ですが、それだけにこだわらず、前述してきたように、時代や社会の推移が伝統+αを要請している現実がある以上、これにこたえていく事が今尺八道を極めて行く人の責任でもあると思います。

では、演奏会を振り返ってみましょう。プログラムは3部に分かれていて、第一部は広島支部特有の盛大なステージとなっていて、第一曲目を流祖中尾都山作曲の尺八本曲「青葉」を故島原帆山13回忌追悼演奏として、指揮=吉原玲山氏、第一尺八独奏=小川映山氏、第二尺八独奏=友末就山氏を筆頭に他140名の合奏で幕を開けた。

古典物は、八橋検校の「御山獅市子」「六段の調べ」、国山匂当作曲「玉川」吉沢検校作曲「千鳥の曲」を、編曲を交えて大きな編成で演奏された。現代作品からは宮城道雄作曲「虫の武蔵野」、初世宮下秀冽作曲「夜の調べ」、唯是震一作曲「尺八・箏・三絃・十七絃のための四重奏曲第二番」をこれも大きな編成で演奏し、第一部を14曲と東広島市立寺西小学校5年生有志による尺八56名の合奏による

「アメージング・グレースともののけ姫」を横山美子先生の指揮で演奏した。尺八の音を出すのは難しいのに、音がよく出ていて、とても良い演奏だった。尺八の指導には連盟会員の花岡鶯山氏が当たり、尺八普及や育成にも努めている。尚、花岡氏は連盟に500本の尺八を寄贈し、その内250本を、東北大震災にあった宮城県石巻市の中学校他へ寄贈した。

第2部は日本尺八連盟の委嘱作品が初演された。

最初の作品は、石井由紀子作曲尺八・箏二重奏曲「藤の抄」で、演奏は連盟技能研究専門委員の柴田旺山氏と箏は高畠一郎氏が息のあった演奏で、作品のもつさわやかな快さをよく表現していた。

2曲目は、和田薫作曲3本の尺八のための「竹暁」で、この作品を坂田誠山指揮3編成18人で演奏した。よく構築された作品内容だが、誰が聞いても分かりやすい作品になっている。

3曲目は、高橋雅光作曲尺八3重奏曲「絆」で、東日本大震災の被害者の方々のために描いた作品で、演奏はこの難曲をととてもよく演奏して頂いたと感謝しています。

第一尺八＝亀沢信山氏、第2尺八＝山田俊山氏、第3尺八＝木藤真山氏。

4曲目は、光崎検校作曲「千代の鶯」は祝賀曲としているが、光崎検校らしい独創的な創意あふれる曲である。尺八＝坂田誠山氏、三絃＝高畠一郎氏、箏＝宮越圭子氏の熱のこもった優れた演奏となった。

第3部は、70分の大作で西田豊子作・演出、石井由紀子作曲グランドカンタータ「竹取ものがたり」。指揮は坂田誠山氏、ソプラノ平福知夏氏、バリトン・語り＝石鍋多加史氏、かぐや姫・小鼓・舞＝麻生花帆氏、長唄三味線＝川東陽華氏、尺八ソロ柴田旺山氏、二十絃宮越圭子氏、打楽器小田桂子氏、コーラス広島中央合唱団と尺八群と箏群の壮大なるアンサンブルで、終曲に相応しく存分に楽しめる作品であった。

箏は正派広島地区、箏曲宮城会広島県西地区、玄箏社広島支部、秀冽社紫線会中国支部、吉岡社中、多武保社中、西本社中、高尾社中、面谷社中、尾道・東広島・三源・府中地区の皆さんと、日本尺八連盟の広島支部を中心に、本部・他支部の協力のもとで、全国演奏大会広島公演を盛り立て大成功に導いた。

高橋雅光（作曲）



コンサトレポート

埼玉邦楽合奏団第1回定期演奏会

日本尺八連盟の坂田誠山会長が統括する、ドルチェ邦楽合奏団グループ（東京・千葉・神奈川）に、新たに埼玉邦楽合奏団が加わり、第一回定期演奏会を年の瀬の12月21日、東京・千葉・神奈川のグループ仲間の協力を得て、埼玉県の上尾市にある上尾文化会館大ホールで催した。

ドルチェ邦楽グループは尺八・箏・十七絃の大合奏を中心に、ソロや小編成のアンサンブルも楽しめる合奏団で「邦楽って楽しい?」「もちろん」をキャッチフレーズとして活動を広げている。

このグループの活動で特筆すべきところは、日本の伝統はもちろん大切にしながら、西洋音楽と邦楽の垣根を取り外し、聴衆に楽しんでもらえる音楽作りを提案し、音楽の質の高さを求めながら、邦楽の大衆化を計っていることである。それと同時にジュニア（小・中学生）を育てて一緒にステージで演奏したり、子供も大人も知っている曲を、邦楽アンサンブルとして編曲して聴かせたりして、近くて遠いように感じていた邦楽って、こんなにも身近で楽しいものという活動を展開している。

プログラムの最初は、石井由紀子が埼玉邦楽合奏団の結成記念曲として新たに作曲した大合奏曲「通りゃんせ」による変奏曲という作品である。（新作初演）

この作品は、こどもたちもよく知っている、わらべ唄の「通りゃんせ」のメロディを主題として用い、洋楽的な手法でまとめられた、子供から大人まで楽しめる作品になっている。（このわらべ唄は、埼玉県川越市の三芳野神社の参道が舞台といわれている）

2曲目は、高橋雅光作曲大合奏曲「彩の国の旅路」である。この作品は2年くらい前に日本尺八連盟埼玉支部のために書いた作品で、「彩の国」を巡り歩く様子を心象風景として表した作品である。

3曲目は、モンゴルのアヨン・バトエルデネ作曲「馬頭琴独奏曲」で、馬頭琴という胡弓を一回り大きくした楽器を弓を使用して演奏する。特に印象に残ったのは、馬の嘶きや走る様子を洗練された演奏で聴かせてもらったことである。

4曲目は、石井由紀子作曲大合奏曲「大河へ」で、曲は「おだやかな曲がれ」～「激流」そして「大河へ」と川の流れを表し、それは意志をもって大河へ向けて漕ぎだしてゆきたいという作曲者の願望にも繋がり、作品もどっしりとした良い作品になっている。

5曲目は石井由紀子編曲による「ザ・ビートルズ・メドレー」でビートルズのヒット曲が次から次へと流れてきて、和楽器でビートルズを演奏することの意外性もあり、とても楽しめる内容になっていた。

6曲目は、ドルチェグループの代表を務める、坂田誠山作曲尺八独奏と合奏のための「翔」で、尺八の特徴を生かした妙味を、洗練された演奏により、独奏と合奏の円熟した味を聴かせて戴いた。

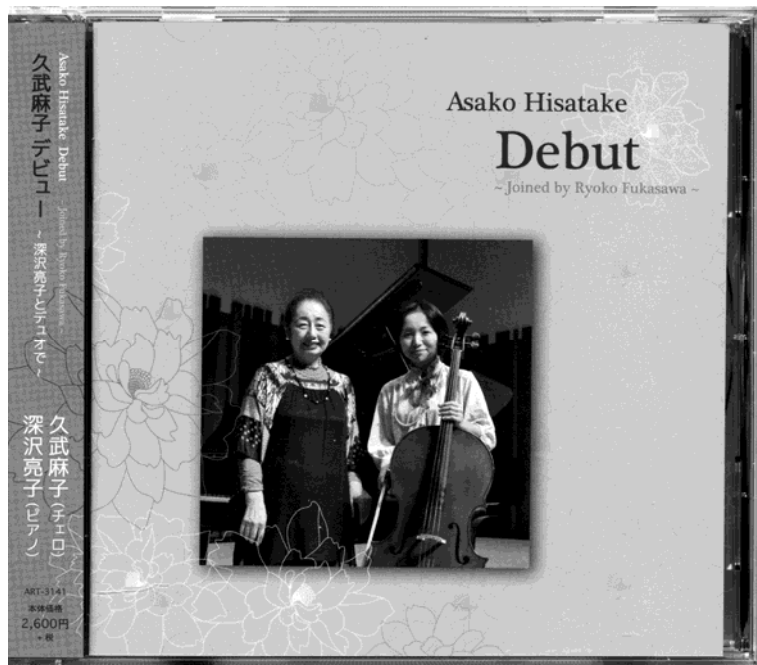
7曲目は、石井由紀子作曲「無幻の原」という、馬頭琴と和楽器の合奏による協奏風な作品になっている。パノラマのように広がる大草原の様子と、馬頭琴の味わい深い音色がよく溶け合っていて、スケールの大きな作品になっている。

埼玉邦楽合奏団第1回の定期演奏会ながら、充実した成果があった演奏会になっていた。

高橋雅光（作曲）

CD 紹介 『久武麻子デビュー～深沢亮子とデュオで～』

このCDは桐朋学園大学で学び、フランスのボルドー音楽院を修了し帰国した、若いチェリスト久武麻子（ひさべ・あさこ）のデビューCDである。このCDで大きな役割を果たしているのは、彼女とデュオを組んだ、大ベテランのピアニスト：深沢亮子である。このCDにはベートーヴェン：ヘンデルの「見よ勇者は帰る」の主題



による12の変奏曲 ト長調 wb0.45 / シューベルト：アルペジオーネとピアノのためのソナタ イ短調 D.821 / バッハ：無伴奏チェロ組曲 第4番 変ホ長調 BWV1010 / 助川敏弥：「果てしなき夕暮れ」、ジスモンダ / シューマン：アダージョとアレグロ 変イ長調 Op.70 が収録されている。

バッハの無伴奏チェロ組曲の演奏には、彼女の確かな技術と生真面目な音楽へ向かい方が表れていたが、音楽的により魅力を感じたのは、深沢亮子とデュオ演奏した曲目だった。シューベルトの

「アルペジオーネソナタ」で、深沢は優しい母親のような息づかいで「さあ、次は貴女の番よ。私が支えてあげるから安心して自分の歌を奏でなさい。」と言うかのように、冒頭のテーマを弾き始める。久武もそれに応え、若々しい抒情性を漂わせて自分の音楽を奏でて行く。深沢のピアノは、時には繊細に、時には毅然として、しかし決して出しゃばることがなく、久武の音楽性を引きだしていた。

興味深かったのは、久武とは半世紀ほどの世代差がある助川敏弥の最近作2曲の演奏だった。極度に節約された音に込められた作曲者の想いを探り、それを聴き手の心に深く届くように伝えることは、若い久武にとって、決して容易なことではなかろう。しかし、こちらも深沢のピアノに導かれ、作者の魂が伝わる好演になったと感じた。

文化というものは、前の世代の蓄積が次の世代に受け継がれ積み重ねられて行くことで、より豊かさを増して行くものである。ベテランの音楽家との交流により作られたこのCDは、久武麻子にとって、最初の大きな成果であろう。これからも、先輩の音楽家たちが与えてくれたものを、大切にしながら、自分の良いところを伸ばし、音楽家として成長をしていくことを期待する。 (中島洋一)

●発売元 (株)アートユニオン)

メーカー品番： ART-3141 / JANコード： 4941135131411

速報：恵藤幸子さん（青年会員）がロシアの音楽コンクールで優勝

本会ピアノ部会の青年会員で、現在ロシアに留学中の恵藤幸子さんが、サンクトペテルブルクにて行われた第16回マリア・ユーディナ国際音楽コンクールのピアノソロ部門で1位になりました。

マリア・ユーディナ国際音楽コンクールにはピアノソロ部門、室内楽部門、ピアノデュオ部門が設けられており、参加者の国籍：ロシア人が多いですが、中国人、韓国人、日本人、中央アジア諸国、(カザフスタンなど)の人、それにイタリア人もいたそうです。

コンクールのWEBサイトを紹介します。 URL: http://www.imfrr.ru/?page_id=416

〈以下に、恵藤幸子さんのメッセージを紹介します。〉

たくさんの方の支えがあったおかげでここまで来られたことに、心から感謝しています。モスクワ音楽院に留学してからというもの、はじめのうちはレッスンもまともに受けられず、自信をなくす日々が続いていました。

さらに最近是不調が続いており、努力しても報われないことが世の中には起こるということを強く実感し、ピアノの道をあきらめようと思ったことも何度もありました。

しかし、そのたびに、まわりの人々の励ましの言葉が私を救ってくれました。今回のコンクールも、正直なところ、自信はあまりありませんでした。リハーサルではほかの人の演奏を聴いた時も、みんな良く弾いていたのです。これは敵わないぞと思いました。

ですが、人と比べることをせずに、自分の中でよい演奏ができればとすぐに気持ちを切り替えられたことが、上手くいけた要因ではないかと思っています。

コンクール直前に、恩師のヴィルサラーゼ先生が、お正月休みにもかかわらず、私のために学校にいらしてレッスンをしてくださいました。本当は、お正月中は完全閉鎖されて校内には入れないはずなのですが、特別に、と学校側も了承してくださいましたおかげです。

ヴィルサラーゼ先生はとても厳しい先生なので、先生から「レッスンをする」と電話が来たのも初めてで、私のためだけにレッスンをしてくださいましたのも初めてでした。これは絶対、ディプロマでもいいのでとらなければと強く思いました。

コンクールの結果が出て、先生に報告をした時には、先生はちょうど学校にレッスンに来られていて、私の報告に目を見開いて喜んでくれたそうです。

その後、レッスンを受けるためにクラスの中に入る生徒一人一人に、「サチコが一位をとったぞ」、「サチコが一位をとったぞ」と、言っていたようで、少し照れくさいですが、とても嬉しかったです。

しかし、これに甘んじることなく、更に勉強を続けていきたいと思っています。日本に戻って、ロシアのメソッドをたくさんの人々に教えられるように、精進を続けていきたいと思っています。 (恵藤 幸子：本会ピアノ部会 青年会員)

第3回「動き、舞踊、所作と音楽」

日時：2015年2月4日（水） 開演／18時30分

場所：すみだトリフォニーホール（小ホール）

主催：日本音楽舞踊会議／後援：月刊『音楽の世界』

公演プロデューサー：高橋 通／高島 和義

《プログラム》

1. 高橋 通 「弧影」貞松瑩子詩、高橋 通作曲

歌：鈴木房江、箏：高橋澄子、十七弦：五十嵐己韻子

一絃琴：高橋通、尺八：川俣夜山、打楽器：児玉和人

2. いとう まく 「ノイズと舞踏のためのプロジェクション」 いとう まく作曲

電子音楽演奏：いとう まく / 舞踏：Novko、Margatica、梅澤 妃美

3. 花崎 さみ八 「茶音頭」（地歌舞）

舞：花崎さみ八 / 三絃：高橋澄子、箏：山崎いま子

（休憩）

4. 笠原 弓香 「Amazing Trinity for Triphony」

曲：①Ave Maria （カッチーニ）

②Por Una Cabeza

〈映画「セント・オブ・ウーマン」より（カルロス・ガルデル）

③Libertango （ピアソラ）

ピアノ：河上薫

ダンス／ベリーダンス：Shantih ダンス／アルゼンチンタンゴ：笠原弓香

5. 橘川 琢 詩曲「愛花」（詩：木部与巴仁）Op. 62（2015年／初演）作曲：橘川 琢

詩唱：木部与巴仁／ヴァイオリン：戸塚ふみ代／ピアノ：森川あづさ／

舞踏：吉村広野

6. 浅香 満 Hayat wa Nafas eia ho`i Respiração e Vida

構成：浅香満、音楽：浅香満&井手野敦

オリエンタル舞踊：KIKI Alma

フルート：阿部麻耶／打楽器：井手野敦

アクト：佐藤友佳子(T1project)&末長香織

1. 高橋 通 「弧影」貞松瑩子詩、高橋 通作曲

2010年に作曲。数々の日本歌曲の詩を作った詩人貞松瑩子が80歳を過ぎて自らの半生を綴ったもの。子供の頃の思い出、戦争の記憶、そして小田原で過ごした日々が語られている。特に小田原の風物が印象的である。作曲者も小田原の出身なので、それを意識して書かれたものと思う。

前半は、連れ合いに先立たれて独り身になった淋しさを思い、今までの生涯を振り返っている。途中で戦争の記憶に触れ、後半は古里小田原の町並みの記憶を懐かしく思い出し、海岸の砂浜での盆行事、線香祭や花火の情景に自分の半生を重ね合わせて、迷いの果てに今に至っている、と書いている。

貞松さんの詩には作曲意欲をかき立てられるものがある。詩は深い余韻を持っている。何作も曲を付けさせて頂いた。その大半が邦楽器を使ったものなのは、伝統的な日本語の美しさを生かした美しい日本語を生かした言葉遣いのためだと思う。

今回の上演について、特に踊や所作を付けないのはコンサートの主旨から外れているが、内容にストーリーが濃いこと、邦楽器が全面に出ている事などで、舞台そのものが視覚的であり、目をつぶって頂ければ情景が見えて来る仕掛けになっているのでご容赦頂きたい。

(作曲者：高橋通)



高橋 通(たかはし・とおる:作曲)

日本医科大学大学院卒業。医学博士。作曲家、一絃琴演奏家。日本音楽舞踊会議正会員、(一般社)なみの会日本歌曲振興会会員に所属。幽意一絃琴鳴琴会を主宰。箏サマーコンサートの会代表。「すばるの会」代表。

主な作品：オペラ「竜宮から来た女房」、オペラ「伝説精進ガ池幻想」、尺八・二面の箏・十七絃のための四重奏曲、ヴァイオリンと箏の為のソナタ第2番、箏独奏ソナタ第11番、箏のための小協奏曲第2番〈西からの風〉など。



鈴木 房江(すずき・ふさえ:ソプラノ)

東京芸術大学声楽科卒業後オーストリアモーツァルテウム音楽院に留学。H・ルートヴィッヒ、S・アンダース、R・シュトライヒ、E・ヒンライナー、P・シルハスキー、各氏に師事。ディプローム修了。在学中モーツァルト週間記念演奏会に入選。教会のソリストを務める傍ら、オーストリア放送(ORF)合唱団に入団し、現代音楽に多く触れる。帰国後は日本の現代歌曲を中心に演奏活動。(一社)波の会日本歌曲振興会会員。



高橋 澄子（たかはし・すみこ：箏）

箏の演奏家。東京芸術大学卒業、同大学院修了。故吉田恭子、故宮城喜代子、宮城数江、小橋幹子、故上木康江、矢崎明子に師事。古典箏曲から現代音楽までの幅広いレパートリーを持ち、白井英治氏 (Vn)、大島晶子氏 (Vn)、ウィーンフィルのシャーギャル氏 (Vn)、ベルリンフィルのリーバーマン氏 (Vn)、オットー・ニコライ弦楽四重奏団など国内外の著名な演奏家と共演し好評を博している。宮城会大師範、森の会々員、つぼみの会々主。日本音楽舞踊会議正会員



五十嵐 己韻子（いがらし・れいこ：十七絃）

大阪大学基礎工学部卒。渡瀬章子師に箏の手ほどきを受け、森川絢子師、高橋澄子師に箏・三絃を師事。尺八を指出敏輔師、田嶋直士師に師事。2008年、ストックホルム東アジア博物館主催のコンサートに参加。関西音楽集団第5期生。生田流箏曲宮城社師範日本音楽舞踊会議準会員

高橋 通（たかはし・とおる：一絃琴）

（プロフィールは作曲者の項を参照）



川俣夜山（かわまた・やざん：尺八）

都山流尺八を川村泰山氏に師事。都山流尺八楽会准師範試験、師範試験ともに首席登第。NHK邦楽技能者育成会第45期修了。リトアニア大統領歓迎レセプションにて演奏。高円宮妃殿下御出席「衣分はじめの儀」の音楽にて尺八演奏。文化庁新進芸術家国内研修制度研修員。長谷検校記念くまもと全国邦楽コンクールにて優秀賞受賞。その他コンクールにて受賞多数。NHK邦楽オーディション合格。URL <http://yazan.bitter.jp/>



児玉 和人（こだま・かずひと：打楽器）

10歳よりマーチング、17歳よりドラムを始め、須藤薫、マキ奈尾美、平下政志らと活動。現代音楽の祭典MEDIAに於いてテリー・ライリーと共演。二期会オペラ『カルメン』『アイダ』彩の国さいたま県民芸術フェスティバル、レナーアンサンブルレーゲンスブルク日本公演、東京国際芸術協会管弦楽団等に出演。三枝成彰/ザ・ゲーム、佐藤勝磨/あたかも祭りの朝に、安藤由布樹/この灯を永遠に、高橋通/トルファンの蜃気楼等の初演に参加。

2. itou maku 「ノイズと舞踏のためのプロジェクション」 itou maku作曲

頭上から降りしきる蝉しぐれ、木枯らしが枯れ木を震わす音。あるいは民俗楽器の弦の軋む音は、人々に強い印象を残します。しかしこれらの非楽音的要素は、西欧近代音楽においては無視されてきました。あるいは街中の車の喧騒、商業施設から漏れ出る騒音の如きは、おしなべて楽音に非ず、と我々は教えられてきました。

シュトックハウゼンは、「西洋音楽の中でノイズはほとんど用いられず、たいていの音楽家は、ノイズのような子音的音響を音楽的に低い素材と見なしていた」と述べています。しかし実際に我々が耳にする世の中の大半の音はノイズです。西欧近代音楽世界の楽音は広大な音の世界の中で、氷山の一角を構成しているに過ぎないのです。むしろ逆にノイズこそが、本来の音のあり方、ということもできるのではないのでしょうか。

この作品は、ノイズと舞踏という、かつて祈りや祝祭と同じように人々と共にあった要素を、電子音響という現代の意匠を用いることで、今日的な形でよみがえらせる試みの『第一章』です。パート1：地、パート2：俗、パート3：異、パート4：天 (itou maku)



itou maku (電子音楽演奏家、作曲家)

Japanoise records 代表。演奏集団・ジャパノイズオーケストラ主宰。電子ノイズ音楽から自作 POPS 曲まで幅広い領域で活動。日本初のノイズデュオ・NORD に参加。ムーンライダーズ鈴木慶一プロデュースにて自作曲発表(徳間ジャパン)。舞踏家との共演、灰野敬二とのデュオ「紗夢座」等多方面で活動。CD 作品に“Inner Trance Organ” (PSF レコード)、大友良英との共演盤“Aoyama Noise Live at Cay” (Airplane)等。慶應義塾大学卒業。博士(学術)。
<http://japanoise.net/>

Novko (舞踏) (写真：左)

南部満氏に舞踏を学んだ後、大野一雄、土方巽等に指導を受ける。2001 年から舞踏公演。ビショップ山田舞踏講座を企画運営。

Margatica (舞踏) (写真：中)

彫刻の制作を学んだ後、動的形姿の実践研究に移行。佐藤祐子舞踊研究所、観世流梅若会で学ぶ。即興身体表現者として即興演奏・映像・朗読等と共演。

梅澤 妃美 (うめざわ・のりみ：ダンス) (写真：右)

打楽器、身体表現等の即興楽団 UDje の一員として活動。2012 年、ダンスカンパニー「ねねむ」の「温風」出演。2014 年、「TOKYO DIAMOND」の「linbo~死ねない森」に出演。



3. 花崎 さみ八 「茶音頭」 (地歌舞)

地歌舞は日本舞踊の中の一つで、江戸時代に御殿舞から市井に広まったと言われていいます。もともとはお座敷の狭い空間で、屏風と燭台を立てて素で舞われるもので、歌舞伎舞踊のようにリズムカルで上下動があり衣装と舞台装置も華やかなものとは対照的で、それゆえ踊るではなく舞うと表現されます。

動きとしては能が基本となっており、摺り足で重心をしっかりと下に落とし、地面からのエネルギーを最大限に利用しながら効率よく姿勢を維持し、体幹の充実を表に伝えることで簡潔で無駄のない動きを実現させます。このように抑えられた動きにより、観る人の感性を深く刺激し、思考の可能性を限りなく広げることができます。

「茶音頭」は茶の湯にちなんだ曲で、茶の湯音頭とも呼ばれます。お茶のお点前によせて、若い娘の恋心を描き、未永く添い遂げられるようにとの願いを混めて舞われる、地歌の中でも華やかな曲になります。柄杓を扱ったり実際に帛紗を捌いたりして、お茶のお点前に始まりお茶のお点前に終わるといふ振付けになっています。

(花崎さみ八)



花崎 さみ八 (はなさき・さみや：舞)

広島県出身。大学で合気道二段を取得、その後、自分の目指す踊りを探求する中で地唄舞と出会い、またオマーン訪問をきっかけにベリーダンスも始める。日本とアラブの舞踊を通じた文化交流に努め、パレスチナやオマーンでも地唄舞を舞い、世界舞踊祭にはベリーダンスで出演する。

現在は、舞踊家としての活動の他、着物コンサルタントとして着物文化の普及に努め、時に会計業務を行ないながら、貸借一致の中に新たな世界を見出す。

高橋 澄子 (三絃)

(1. 弧影、高橋澄子の項を参照)



山崎 いま子 (やまざき・いまこ：箏)

昭和50年に鳳友会会員となり(古谷富蔵会長)、教師免許状を取得。平成11年に生田流箏曲宮城会会員(師匠・高橋澄子)となり、教師免許状を取得、平成20年には師範となる。つぼみの会に所属。ことサマーコンサートの会会員。日本音楽舞踊会議準会員。

4. 笠原 弓香 「Amazing Trinity for Triphony」

踊ることを忘れ絶望した孤独な踊り子が、深い森の奥で女神の舞に出会う。祈りと深い安らぎに思わず進みだし、そっと女神に近づく踊り子。ためらいながら女神に触れると、女神は踊り子にダンスを教えた姉の姿に変わり、優しく手を差し伸べる。たおやかな旋律が暖かく沁みわたり、忘れていた踊る喜びが蘇る。やがてひとときの夢のように女神は姿を消す。残された踊り子は魂を取り戻し、一人立ち上がり、強く自由なタンゴ（＝リベルタンゴ）を踊り始める。1曲目のAVE・マリアの静謐は、2人が出会う2曲目、切ないけれど温かく華やかさに溢れた「ポル・ウナ・カベサ」に変わります。アルゼンチンを代表する音楽家・歌手、カルロス・ガルデルのこの曲は、映画「セント・オブ・ウーマン」の挿入歌としても名高く、ここでは映画の「失敗も困難もステップとして踊れ」という作中のメッセージを込めています。最後のソロの踊りは、ピアソラのあまりにも有名な作品。異端として排除されながら信念を貫いたピアソラの代表作を、女性ダンサーのソロ・タンゴで表現します。ベリーダンスの女性的な柔らかさとタンゴの直線的な歯切れの良さの対比、そして全編を貫く、繊細でありながら圧倒的な迫りに満ちたピアノの旋律。三つの際立つ個性のバランスを存分にお楽しみください。（笠原由香）



笠原 弓香（かさはら・ゆみか：ダンス／アルゼンチンタンゴ）

2001年、アルゼンチン人ダンサーの直弟としてトラディショナル・タンゴを学び、2003年より助手を務める。指導のアシスタンスを行う一方、海外ダンサーとともに多くのダンスイベントを企画・主催。2010年にはパークホテル東京にてアルゼンチン大使館後援のもとタンゴリサイタルを実現した。2013年よりソロダンサーとして独立。男性のリードによって即興の変化を遂げるアルゼンチンタンゴの基本形を破りながらも、ダンスそのものはあくまでもトラディショナル・スタンダードであり、タンゴが本来持つ強靭さや体温のぬくもりを伝えるパフォーマンスを目指している。



河上 薫（かわかみ・かおる：ピアノ）

アンサンブルピアニスト。東京国際芸術協会伴奏ピアニスト。日本大学芸術学部中退。東京芸術大学在学中にパークレー音楽院に留学。モスクワ音楽院マスターコース受講。TIAA 全日本クラシック音楽コンサートにて審査員賞受賞。第10回 日本アンサンブルコンクール入選。第1回 ネオクラシック国際コンクールファイナリスト。オペラ・バレエ・器楽・各種ダンスなど、ジャンルにとらわれずに、演奏会やコンクール伴奏、企業パーティー、小中学校芸術鑑賞会、自治体イベントなどで活動中。ユーフォニアム・パーカッション・ピアノのトリオNew Age 3pieces』メンバー。



Shantih (シャンティヒ：ダンス／ベリーダンス)

子どもの頃からの虚弱体質改善のためヨーガ 気功 ベリーダンス等と出会う。

USA India Egypt Tibet Nepalに度々渡り 数多くの師より指導を受ける。

ナイルフェスには 2006年より参加。

現在 日本ヨーガ学会 教授 気功太極拳師範 ベリーダンサー『New Age 3pieces』メンバー。

5. 橘川 琢 詩曲「愛花」(詩：木部与巴仁) Op. 62 (2015年／初演)

「誰も知らない部屋」「ここにいるのは／二人／二人だけ／二人きり／二人しかいない／二人の部屋／いっぱい／咲く／花たち／花と 私／私たち 二人／花といる・・・」密室に展開される、二人の愛の物語。

詩の中でうたわれる愛情の暗喩とは、花と、むせ返るような花の精・花の香りであるのか、花の色だけある炎なのか。

ここ数年、花道家との多くの共作を経て、「花」と音楽の関係を深く模索する作曲者。その作曲者と共演回数が多く、音楽と感情世界を深く共有・共感・共振出来る出演者、詩唱：木部与巴仁、ヴァイオリン：戸塚ふみ代、ピアノ：森川あづさ。さらに舞踏：吉村広野が加わり、詩人の隠された情の世界に迫る。(橘川 琢)

橘川 琢(きつかわ・みがく：作曲)



作曲を三木稔、助川敏弥、鈴木一真、堀井友徳の各氏に師事。第2回牧野由多可賞作曲コンクールファイナリスト。文部科学省音楽療法専門士。日本音楽療法学会認定音楽療法士(補)。

平成17年(2005年)度(第60回記念)文化庁芸術祭参加。2006年・2008年度文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が、採択される。07年全曲ピアノ曲個展開催。

08年名古屋フィルハーモニー交響楽団主催作品個展開催、09年作品個展「花の嵐」開催、10年作品個展「夏の國」開催、11年作品個展「うつろい」開催。14年15年と二年連続で「Tokyo to New York」に作品が採択され、New Yorkほか海外で演奏される。

「新感覚抒情派(『音楽現代』誌)」と評される抒情豊かな旋律と、日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。また現在、詩唱・木部与巴仁、舞踏・大野慶人の各氏ほかと共作、映像芸術・舞台を含めた美の可能性と音楽の界面の多様性を追究している。

日本音楽舞踊会議 理事。月刊「音楽の世界」副編集長。



木部 与巴仁 (きべ・よはに : 詩唱)

“詩と音楽を歌い、奏でる”「トロッタの会」を、2007年以来、作曲家、演奏家と共同運営。文字のみに依らない発声される詩、音楽になろうとする詩のあり方を追究。さらに全身を使った“動き”の作品も発表している。昨年、新著「伊福部昭の音楽史」を春秋社より刊行。最新第21回「トロッタの会」は、は5月30日(土)16時、早稲田奉仕園リバティホールにて開催予定。



戸塚 ふみ代 (とつか・ふみよ : ヴァイオリン)

愛知県立芸術大学卒業、桑原賞受賞。
名古屋フィルハーモニー交響楽団、カルテットディソナンツェンで活躍。
ベルリン芸術大学にてベルリンフィルコンサートマスターのミッシェル・シュヴァルベに師事。アンサンブル・ルレ主宰。作曲家の実験工房「トロッタの会」で現代作曲家の作品ほか伊福部作品を数多く演奏。



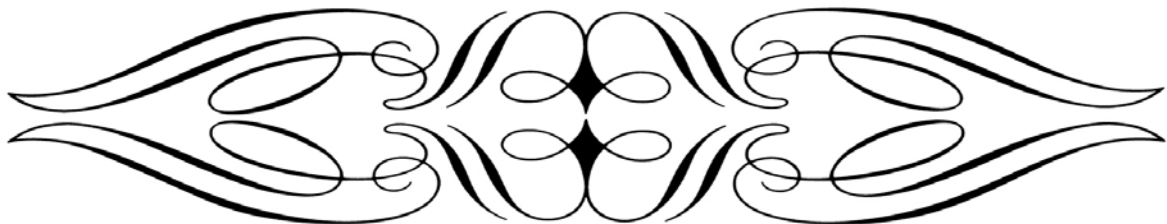
森川 あづさ (もりかわ・あづさ : ピアノ)

都立芸術高校を経て東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業。
クラシックのみならず、バンドでのライブ活動も多数行っている。



吉村 広野(よしむら・ひろの : 舞踏)

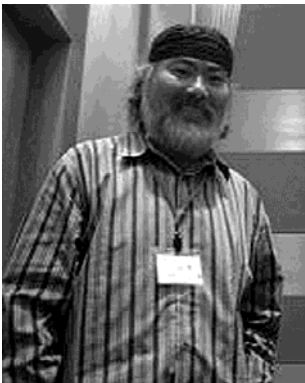
2004年より劇団阿彌劇団員として生と死をテーマにお能の要素を含む演劇活動を約7年間行う。2009年より舞踏を大竹宥熙に師事。2011年舞踏家に転身、東日本大震災二ヶ月後、北辰の会にて舞踏家デビュー。以後年間二回程のペースで北辰の会にて公演活動中。外部出演は今回初となる。



6. 浅香 満 Hayat wa Nafas eia ho`i Respiração e Vida

「いき（息）」は「いきる（生きる）」に繋がる言葉であるという説があります。「呼吸」は「生命」の最も美しい象徴の一つとして、自然との対話を重ねながら時間の中で変容を遂げます。世界各国の古典芸能、宗教観を反映させた伝統儀式の多くは、人間を含む生物の営みの祝福と、「母」なる大地と「父」なる天の幸福な交わりに祈りを捧げながら、魂を肉体から解放させる秘術を「呼吸」に寄り添わせています。

様々な国の様々な文化に精通している出演者の多大な協力を得て、「生命」の讃歌を多角的に試みました。（浅香 満）



浅香 満（あさか・みつる：作曲）

早稲田大学第一文学部中退。東京藝術大学作曲科卒業。同大学大学院修了。これまでに、＜ヨーロッパ・アジア国際音楽祭＞（ロシア）、＜ヤノヴィエック国際音楽祭＞（ポーランド）はじめ、ルーマニア、ハワイ、イタリア、フィンランド、韓国等で開催された国際音楽祭に度々招かれ、作品は何れも大好評を博している。沖縄本土復帰20周年記念演奏会、ハビビ元インドネシア大統領歓迎演奏会等の委嘱を受けた他、故・本田美奈子を始めとするアーティストのための編曲も数多く手掛ける。日本作曲家協議会、日本・ロシア

音楽家協会、日本音楽舞踊会議各会員。



井手野 敦（いでの・あつし：音楽/打楽器）

パーカッショニスト、ドラマー。DJとしてキャリアをスタート。DJ時代に培ったアレンジや楽曲構成力の特異なセンスは、パーカッションやドラムの演奏にも活かされ、May J、гентウキ等のメジャーPops系アーティストのレコーディングからブラジル、Jazzのレコーディングやライブ演奏に至るまで様々な場面で、観て聴いて感じさせる体感型の演奏で観客を魅了している。



KIKI Alma（オリエント舞踊）

オリエント舞踊家。京都府生まれ。弓道指導者の父と日舞師範の母のもと、武芸の空気を幼心にしたためて育つ。1998年オリエントダンス（ベリーダンス）界に入門、2004年2月4日 奈良県天河大弁財天社にて天啓を授かり、プロフェッショナルダンサーとして活動を開始。おもにアラブ・オリエント音楽演奏家とのライブパフォーマンスを通し自らのパフォーマンススタイルを磨いていく。またトルコ、レバノン、アメリカ西海岸、そしてエジプトへの旅と各地でのダンストレーニングをとおり、‘音楽と踊りのマリアージ

ユ’ というコンセプトをいただくことになった。2013・2014・2015年トルコRakkas Istanbul International Orientaldance Festivalにて日本人唯一の公式講師をつとめる他、宗教と国境を超えたKIKIのオリエンタルダンスアートは近隣アジア各国においても人気を博し、その作品世界と表現力に海外からの評価も高い。



阿部 麻耶（あべ・まや：フルート）

武蔵野音楽大学器楽科を経て、東京ミュージックメディアアーツ尚美ディプロマコース修了。第2回仙台フルートコンクール入選。第16回日本クラシックコンクール第3位(最高位)第14回フルートコンベンションコンクールアンサンブル部門にて第1位(金賞)を受賞。第15回フルートコンベンションコンクールピッコロ部門入選、第16回同コンクールピッコロ部門第3位。2007年霧島国際音楽祭にてT.ハッチンスのマスタークラス受講し、同氏とオーケストラで共演。2012年ソロリサイタルを開催し、師である清水信貴氏と共演。現在

室内楽、オーケストラを中心に活動し、後進の指導にもあたっている。フルートアンサンブルFIORE、ルポールのメンバー。2011年FIOREの1stアルバム「La memoria del FIORE」をリリース。早稲田大学高等学院非常勤講師。

故渡辺国安、土方逸郎、高久進、野口龍、清水信貴、マスタークラスにてT.ハッチンス、M.ファウスト各氏に師事。



佐藤 友佳子(さとう・ゆかこ：T1project/アクト)

2011年『動物園2SIDE』（下北沢「劇」小劇場）で本格的に俳優として活動を始め、以降ショートストーリーズ『いま幸せです』『リ・スタート!』、『STEP OVER THE FUTURE』（ザ・ポケット）、TOKYOハンバーグ『へたくそな字たち』（サンモールスタジオ）と精力的に出演を続けている。今回はワーサルシアターにてTOKYOハンバーグ+B.LET'S合同公演(5/27~6/1)への出演が決定している。浅香満満作品には2005年に続き2度目の参加となる。



末長 香織（すえなが・かおり：アクト）

福井県生まれ。高校卒業を機に大阪に移り住み、美容師をしていた。2009年より演劇活動始める。ダンス、映像などの活動を経て2014年より東京に移り住み、演劇活動を行っている。またヘアメイクなどのスタッフワークも行っている。

日本音楽舞踊会議 楽譜出版部からのお知らせ

楽譜出版部が出来て新しい出版を始めています。それに伴い、既に出版済の楽譜の在庫確認、価格改正を致しましたのでご報告します。(楽譜出版部長 高橋雅光)

日本音楽舞踊会議 発行中の楽譜

助川敏弥：KOMORIUTA 作品73 (1986年)

(東北地方に伝わる子守唄を主題としたピアノ曲) A4版9頁 1,260円

ピアノ曲集「ひえつきぶし」(2002年) (東北民謡を主題とした作品)

Lacrimosa「ちいさき たましいの ために」

四手連弾「風の遊び」 A4版19頁 1,680円

歌曲集「白く光れり」向山房枝詩(1996年)

(「ゆうやみ」「ゆらゆらと」「すずしさを」「ひさびさに」「つけしみに」)

A4版17頁 2,100円

歌曲集「ガラスの花束」立原えりか詩(1976年)

(「陽春」「光りの矢」「ムラサキイロの少年」「親指姫」「秋のままごと」)

A4版25頁 2,940円

歌曲集「夕顔」金子みすず詩(1999年)

(「夕顔」「土の草」「みそはぎ」「草原の夜」「だれがほんとを」)

A4版13頁 1,680円

高橋雅光：どんぐりっこのメロディー

宮田滋子詩による「おかあさんといっしょにうたう、あたらしい童謡曲集」

B5版27頁 2,100円

中島克磨：「モスクワ」ピアノのための詩曲 Poema“Moskva” for piano

A4版8頁 1,570円

木幡由美子：「トッカータ」ピアノのために “TOCCATA” for piano

A4版8頁 1,260円

北条直彦：「ピアノのためのヴィジョン」Vision for piano A4版7頁 1,260円

黒髪芳光：「こどもの祭りⅡ」ピアノのための四手連弾曲集

(バイエル・メトードローズ併用) A4版20頁 2,100円

小平時之助：歌曲集「北の国から」(「木地山ぼっこ」「ほしがき」他5曲)

A4版14頁 1,890円

金籐 豊：「ピアノのためのトッカータ」Toccat—interactive for piano

A4版16頁 1,890円

西山淑子：「金子みすゞの詩による童謡集」

A4版51頁 3,150円

*お求めは日本音楽舞踊会議まで、郵便振替用紙にご注文の曲名をお書きの上ご送金ください。

日本音楽舞踊会議出版局

読者の皆様へ 『音楽の世界』 刊行形態変更のお知らせ

『音楽の世界』は1962年に創刊して以来、50余年の間、月刊誌として刊行続けてまいりましたが、今年2015年4月から刊行形態を変更し、季刊として毎年4回発行することになりました。過去においても、月刊から季刊に変更する議案が提出されたことがありましたが、その時は期が熟さないという判断のもと、月刊体制が継続されました。

しかし、厳しい経済環境、変化する社会状況を注視し、その上で本誌をより良い状態で継続させるための道筋をつけるには、季刊誌として再出発することが好ましいという結論に達し、昨年10月27日に開催された臨時総会において、『音楽の世界』の季刊化が正式決定いたしました。前述したように季刊化の実施は今年4月からとなりますが、今年の1月号～3月号は月刊として発行します。従って今年の発行は月刊3回、季刊3回の計6回となり、2016年から年4回の発行で固定されます。

季刊に変更後の発行月は、冬号（1月）、春号（4月）、夏号（7月）、秋号（10月）となります。刊行体制の変更前後は、体制移行のための事務処理など難しい問題もありますが、可能な限り読者の皆様にご迷惑をかけず、スムーズに移行出来るようつとめますので、ご理解とご協力のほどお願い致します。

なお、季刊となり、経済的、時間的に出来たゆとりを、本誌の誌面の向上につぎ込み、より魅力的な雑誌とするよう努力する所存ですので、引き続いてご愛読下さるようお願い申し上げます。そしてこの機会にさらなる読者拡大を目指すつもりですので、ご協力いただければ幸いに存じます。なお季刊後の価格は1部800円を予定しておりますが、この件につきましては、来月号で出版部よりお知らせします。

日本音楽舞踊会議季刊誌『音楽の世界』編集長 中島 洋一

コンサート案内

社会福祉法人 緑の風を支援するチャリティーコンサート

世界にはばたくヤングアーティストシリーズ第3回

2015年3月1日（日） 千駄ヶ谷 津田ホール 14:30開演(14:00会場)

〔緑の風は〕山梨県北杜市にある社会福祉法人緑の風は、知的障害のある人たちが地域で自分らしく暮らし、地域で働くことの支援を行うための障害福祉サービス事業所です。チャリティーコンサートを主催している「麦の会」は、〔緑の風〕を支える後援会で、毎年良質のチャリティーコンサートを開催しております。本会は「緑の風」の理事長の武田和久氏から、厚い支援を受けておりますし、「麦の会」と本会両方に関わっている方も多く、両団体は親密で深い関係にあります。

上記のコンサートのチラシを次ページに掲載しますので、多数の方々のご来場を期待いたします。
(本誌：編集長)

知的障害のある人たちの
社会参加を支える！

社会福祉法人緑の風を支援するチャリティコンサートvol.14

世界にはばたく 若手アーティストシリーズ第3回

プロデュース 岡山 潔

W.A. モーツァルト

ディヴェルティメント 二長調 K136

J. ハイドン

チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob.VIIb:1

F. メンデルスゾーン

弦楽八重奏曲 変ホ長調 op.20

2015/3/1日

会場 ■ 津田ホール

開演 ■ 14時30分 (14時開場)

チケット ■ 一般 / ¥4,000 (学生 / ¥2,000)

懇親会 ■ ユーハイム (津田ホールB1F)
16時45分～ (¥3,000)

主催 緑の風後援会 麦の会
チケットのお問い合わせ ☎03-3556-3056 (麦の会事務局)

天才メンデルスゾーン 若さと情熱の八重奏曲

メンデルスゾーンの天才ぶりはモーツァルトと並び称されますが、早熟さにおいてはモーツァルトをさらに凌ぐといえるでしょう。

12～14歳で12曲のシンフォニア、有名な「結婚行進曲」は17歳、そして今回演奏される「弦楽八重奏曲」は16歳で書いているのですから、まさに驚嘆すべき才能です。

4つのヴァイオリン、2つのヴィオラ、2つのチェロによって演奏されるこの八重奏曲は、これから世界にはばたく有望な演奏家たちに相応しい、若さと情熱がほとばしり出る最高傑作です。

コンサートの前半、ハイドンのチェロ協奏曲を独奏する加藤陽子さんは、感受性豊かな素晴らしい音楽家です。魅力あふれる彼女の演奏に期待が高まります。

プロデューサー 岡山 潔

演奏者



加藤 陽子 (独奏チェロ)

東京藝術大学附属音楽高等学校、同大学を卒業。在学中、福島賞、安宅賞、同声会賞を受賞。同大学院修了後、2011年秋より渡欧。文化庁新進芸術家海外派遣研修員として奨学金を得て、2013年ウィーン国立音楽大学大学院を修了。各地でのチェロリサイタル、室内楽演奏会の出演、開催などソリスト及び室内楽演奏者として積極的な演奏活動を展開。

第1回青森県立美術館「チャイコフスキー・ピアノトリオ・オーディション」第1位。第9回ピバホールチェロコンクール第2位。第80回日

本音楽コンクール入選。第15回松方ホール音楽賞第1位。ウィーン国立音大主催夏期国際音楽アカデミーにてArtis-Preis(第1位)。

チェロを中島顕、寺田義彦、河野文昭、山崎伸子、タマーシュ・ヴァルガの各氏に師事。

趣味は決まったものはありませんが、好きなことにはすぐに夢中になります。自然の風景をみたり、犬とお散歩したり、読書してリフレッシュします。食べることが好きで、とくに和食は大好き。フルーツも欠かせません。



小川 響子

(チェンバーオーケストラ・緑の風 コンサートミストレス)

奈良県出身。第10回東京音楽コンクール弦楽部門第一位および聴衆賞受賞。国際ラヴェルアカデミーにてボナ美術館賞を受賞。これまでに新日本フィル、東京フィル、日本フィル、藝大フィル、神戸市室内合奏団、他オーケストラと共演。中之島国際音楽祭、芸大定期室内楽、JTが育てるアンサンブルシリーズ、軽

井沢大賀ホール春の音楽祭2014、東京文化会館モーニングコンサートに出演。小澤国際室内楽アカデミー奥志賀に参加。現在、漆原朝子、原田幸一郎の両氏に師事。東京芸術大学4年在学中。

趣味は読書。好きな食べ物ほうとう、好きなアーティストはグヴィッド・オイストラフ。



チェンバーオーケストラ・緑の風

社会福祉法人緑の風を支援するチャリティコンサートのために、2013年に誕生した室内オーケストラです。メンバーは、毎年春にTAMA音楽フォーラムが開催する「リゾナーレ室内楽合宿セミナー」に参加し、研鑽を積んだ優秀な若手演奏家たちが中心で、その若々しく洗練とした演奏と精緻なアンサンブルは高い評価を得ています。

| | | | |
|--------|--------|---------------|--------|
| ヴァイオリン | 小川 響子* | 戸原 直* | 高宮城 凌* |
| | 横島 礼理* | 日吉麻優子 | 野澤 匠 |
| ヴィオラ | 有田 朋央* | 古賀 郁音* | |
| チェロ | 伊東 裕* | 黒川 実咲* | |
| コントラバス | 片岡 夢児 | *は、八重奏演奏者メンバー | |

社会福祉法人緑の風を支援する「麦の会」

緑の風は、知的障害のある人たちが、地域で自分らしく暮らし働くことの支援を行うため、2003年山梨県北杜市長坂町に障害福祉サービス事業所緑の風を開所しました。2007年には東京都千代田区より障害者就労支援事業所(ジョブ・サポート・プラザちよだ)の運営を受託し、障害者就労の場であるパン工房(さくらベーカリー)と併せて区役所内で活動しています。後援会「麦の会」は、緑の風を支える組織として2003年に発足、このチャリティーコンサートの収益を緑の風への援助金として寄付しています。

●津田ホール 渋谷区千駄ヶ谷 1-18-24



会と会員の情報

CMD J 会と会員のスケジュール

2 月

- 1 日(日) ピアノ部会試演会【戸引小夜子会員高円寺スタジオ 10:00~】
4 日(水) 動き 舞踊 所作と音楽 第3回公演【すみだトリフォニー小ホール】
(本号にプログラム掲載)
7 日(土) 2 月度定例理事会【会事務所 19:00】
8 日(日) 原口摩純 ピティナ トークコンサート
ピアノソロ、連弾、ブラームス:ピアノトリオ
【フィリアホール/横浜青葉台 入場無料問合せ申込:ピティナ 03-3944-1583】
11 日(水・祝) 日本音楽舞踊会議 2015 年度(第 53 期) 定期総会
【練馬文化センター集会室 13:15~16:45】

3 月

- 5 日(木) 邦楽部会第 2 回演奏会【すみだトリフォニー小ホール】
演奏曲目・演奏者(演奏順等未確定)
- 太鼓の曲(杵屋正邦作曲): 三味線 杵屋静子、三味線: 杵屋勝真代、太鼓: 月太左衛
 - 八段調(八橋検校作曲): 箏: 本山淳一(山田流箏曲)
 - みだれ(八橋検校作曲):
箏: 五十嵐己韻子、大田由美子、山崎いま子、高橋澄子(生田流箏曲)
 - 春の夜(山本游魚作曲): 高橋通(一絃琴)
 - 箏独奏ソナタ第八番(高橋通) 箏: 高橋澄子
 - 尺八・箏二重奏曲 招賀「花燃ゆる野」Op. 63(橘川琢作曲) 尺八: 宮崎文香、箏: 小野裕子
 - 落葉の踊(宮城道雄作曲): 箏: 砂崎知子、三絃: 高島一郎、十七絃: 細井美欧
- 6 日(金) 橘川琢作曲「邦楽創造集団オーラ J 定期演奏会」
尺八二重奏曲《名残花》op. 64【めぐろパーシモンホール(大ホール)】
7 日(土) 3 月度定例理事会【会事務所 19:00】
8 日(日) 原口摩純ソロリサイタル ヤマハ銀座サロンコンサート
【お問合せ&申込み: ヤマハ銀座店 03-3572-3132】
10 日(火) 深沢亮子 朝日カルチャーセンター 共演: 水野由紀(Vc)
シューベルト アルペジオーネ他
【新宿住友ビル 7F 13:00 問合せ: 朝日カルチャーセンター 03-3344-1945】
16 日(月) 第 7 回フランス歌曲研究コンサート 18:30~中目黒 G T プラザホール

4 月

- 7 日(火) 4 月度定例理事会【会事務所 19:00】
10 日(金) フレッシュコンサート 2015【すみだトリフォニー小ホール詳細未定】
11 日(土) 深沢亮子 シューベルトソサエティ 20 周年記念コンサート
4 つのワルツ、即興曲 D935 他 共演: 水野由紀(Vc)
【紀尾井ホール 14:00 問合せ: シューベルトソサエティ 03-5805-6303】
19 日(日) 橘川琢作曲「Tokyo to New York」コンサート
秋月譜~AUTUMN Moonlight~Op. 61-3【New York】
25 日(土) 深沢亮子 朝日カルチャーセンター

モーツァルト ピアノカルテット No. 2 Es Dur K. 493

シューマン ピアノカルテット Es Dur op. 47

共演：瀬川祥子 (Vn) 田原綾子 (Va) 水野由紀 (Vc)

【新宿住友ビル 7F 13:00 問合せ：朝日カルチャーセンター03-3344-1945】

5 月

7日(木) 5月度定例理事会 【会事務所 19:00~】

14日(木) 作曲部会公演【すみだトリフォニー小ホール 詳細企画中】

16日(土) 深沢亮子コンサート 演奏とお話

モーツァルト・シューベルト・原田稔の作品

【14:30 東金文化会館小ホール 問合せ：東金文化会館 0475-55-6211】

29日(金) 深沢亮子リサイタル モーツァルトとシューベルトの夕べ

【19:00 浜離宮朝日ホール 問合せ：新演奏家協会 03-3561-5012】

30日(土) 橘川琢作曲 「詩と音楽を歌い、奏でる トロッタの会 Vol. 21」

(曲目) 「光雨-HIKARIAME-／扇田克也の作品と共に」 Op. 66

【早稲田奉仕園リパティホール】

6 月

8日(月) 6月度定例理事会 【会事務所 19:00】

14日(日) 日本音楽舞踊会議 CMDJ 創立 50 周年記念演奏会

【東京文化会館小ホール 詳細企画進行中】

29日(月) 深沢亮子 日唄協会コンサート 共演：瀬川祥子 (Vn) 笹沼 樹 (Vc)

ハイドン ピアノトリオ G Dur Hob. XV-25 ベートーヴェン ピアノトリオ

B Dur op. 11 「街の歌」 【18:00 霞が関ビル 36 F 東海クラブ】

7 月

3日(金) 声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」

【すみだトリフォニー小ホール午後公演(詳細未定)】

7日(火) 7月度定例理事会 【会事務所 19:00】

9 月

29日(火) CMDJ2015 年 オペラコンサート

【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

10 月

12日(月・祝) 様々な音の風景ⅩⅡ (20世紀以降の音楽とその潮流)

【すみだトリフォニー小ホール】

12 月

3日(木) 室内楽の夕べ

出演：深沢亮子(Pf.)、恵藤久美子(Vn.)、中村静香(Va.)、安田謙一郎(Vc.)

【音楽の友ホール(詳細未定)】

2016 年

1 月

17日(日) 声楽部会主催公演 2016 年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・

【すみだトリフォニー小ホール 午後公演(詳細未定)】

編集後記

このところ、フランスの新聞社が襲われたり、日本人がテロリストに捕らわれ、命を奪われたらしいという、怖い事件が立て続けに起こっています。21世紀の世では、国家間の大きな戦争は起こりにくいと思いますが、テロの方は、それと反比例して増える傾向にあります。テロは断じて許してはいけません、一般のイスラム教徒の方々はテロとは無関係です。このことは、しっかり頭にに入れておく必要があります。本会も2月11日に大会を経て、本当の新年度がスタートします。世界平和の願いを込めながら、活発な芸術活動を行って行きたいと思います。総会前の2月4日には「動き・舞踊・所作と音楽」という、他芸術ジャンルとのコラボレーションによる、本会ならではの催があります。過去の2回は好評でしたが、3回目の開催となる今回も、過去を上回る成果が期待できると思います。多くの方が足を運んでくださることを期待します。(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

| | | |
|-----|-----------------------|--------------|
| 北海道 | ヤマハ・ミュージック札幌店 | 011-512-1726 |
| 福島 | 福島大学生協 | 024-548-0091 |
| 千葉 | 紀伊国屋書店千葉営業所 | 043-296-0188 |
| 東京 | オリオン書房外商部 | 042-529-2311 |
| | (株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター | 03-3354-0131 |
| | アカデミア・ミュージック(株) | 03-3813-6751 |
| | 全国学生生協連合会図書サービス | 03-3382-3891 |
| | 早稲田大学生協ブックセンター | 03-3202-3236 |
| | (株)ジュンク堂書店 東京外商部 | 03-6457-7049 |
| 神奈川 | 昭和音楽大学購買店 | 046-245-8100 |
| 静岡 | 吉見書店 | 054-252-0157 |
| 愛知 | 正文館書店外商部 | 052-931-9321 |
| | (株)東海図書館サービス | 052-501-0263 |
| 大阪 | (株)ヤマミュージック大阪心斎橋店 | 06-211-8331 |
| | ユーゴー書店 | 06-623-2341 |
| | (株)ジュンク堂書店 外商本部 大阪支社 | 06-4693-8210 |
| 兵庫 | (株)ジュンク堂書店 外商部 | 078-262-7794 |
| 京都 | 龍谷大学生協書籍部 | 075-642-0103 |
| 沖縄 | 沖縄教販(株) | 098-868-4170 |

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光

戸引小夜子 北條直彦

音楽の世界2月号(通巻566号)

2015年2月1日発行 定価500円(本体462円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間:5000円 (6ヶ月:2500円) 振替00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします